
もう、何も要りません。

葉月 クロエ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

もう、何も要りません。

【コード】

N3085D

【作者名】

葉月 クロエ

【あらすじ】

屋上で出会った女子高生ハナとゲイの男子高生ユウの二人の話。
生きること耐えるだけの日々を送る二人が送る生活と結論。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。 1（前書き）

この作品は、太宰治賞の一次選考に通過し、二次選考に落選しました。

でも、自分ではとても思い入れがある作品です。
ご感想など戴けたら幸いです。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。 1

第一話

1月12日、木曜日。

そこはただの薄汚い屋上だった。

薄汚い空と薄汚い校舎の見える屋上だった。

そこで私達は出会った。

頭の悪い私と、醜い顔の彼が。

「ねえ」

彼が振り向く。

その時何故彼に話しかけたのか、未だに分からない。

「これから遊びに行かない？」

その時、彼は微かに微笑んでいたような気がする。

私達は街に出て、私のよく行くカフェに入った。

ここの紅茶は美味しくて、話を弾ませてくれる。

最初のうちこそ緊張していたけれど、美味しい紅茶のおかげと、時が経つにつれて、随分と打ち解けていった。

彼の名前はユウ。私はハナと名乗った。

私達の学校は、本来屋上への扉には鍵がかかっていて入れないようになっている。

でも私は、こっそり職員室から鍵を盗んで合鍵を作って持っていた。

ユウも同じようにして合鍵を持っていたらしい。

だから今日屋上で彼と出会って、正直言うと私は心底驚いていた。合鍵を持っている人が他にいるなんて思わなかったから。

もう、何も要りません。

彼もそれは同じだったらしい。

その事を話して、二人笑い合った。

彼は醜かったが、穏やかで、不思議な魅力があった。

気がつけば外は夕方を過ぎるくらいの時間。

お酒でも飲みに行つて、もっと話したい気分だったけれど、あいにく制服のままだからお店には入れない。

でも、このまま解散するのは名残惜しくて。

もっともつと、彼と話していたい。そう思ったから。

「ねえ、時間、大丈夫？まだいける？」

「ああ、それは全然大丈夫」

良かった。

「じゃあ、ちょっとコンビニで色々買つて、場所変えて話しよ」

私の誘いにユウは快く応えてくれた。

私達はコンビニでビールやカクテルとかを買い込んで、近所にあつた公園の真ん中に、そこら辺で拾つて来たダンボールを広げて座つて、ホームレスのような宴会を始めた。

周りを通る人がびっくりしたように見てくるのが面白い。

本物のホームレスまで私達を不思議そうに見ていた。

「乾杯！」

ビールの缶を重ね合わす。

酔いのおかげで、話はますます進んでいく。

好きな音楽、好きな作家、好きな画家に漫画家…。

私達は驚く程気が合った。

初めて会つて喋る人と、これだけ気が合うなんて。

私はひどく驚きつつ、とても嬉しかった。

たくさん喋つて、いっぱい笑つて、飲んで。

楽しい。

楽しい。

笑うあたし。笑う彼。

こんなに楽しいのはどれくらいぶりだろう。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

楽しくて、酔っていて、余りにも気持ちよかったから。

私は思わず、いつも思っている事を彼に聞いてしまった。

聞くつもりなんか、全くなかったのに。

多分、誰にも、一生。

「ねえ」

「生きてるのって、楽しい？」

「え？」

「ちょっと真顔で彼が問い返す。

「私ね、楽しくないの」

「続けて私は話す。

「殆ど毎日、苦痛で、苦痛で。今日が終わるまで後何時間、とか、ただ時間が過ぎるのを待ってるだけの日もあるの。超不毛だよね」
言ってから、私は後悔した。

本当に、誰にも言うつもりはなかった事だから。

重い話だし、ひかれちゃうかな。

「大丈夫。僕も楽しくないから」

ビールを片手に彼が言う。

私は驚いた。

どうして？って聞かれるか、引かれて流されるか、どちらかの反応が返ってくるものと私は思っていた。

だけど、僕も楽しくない、彼はそう言った。

「て言うか、苦痛と絶望が……殆ど毎日続いているような状態だな。

逃げ場はあるのか？ってくらいに」

まさか、彼も同じだなんて。

まさか、今日会ったばかりの人なのに。

気が合うだけじゃなくて、生きてる事の思いまで同じだなんて。

私と同じに、彼も苦痛を抱えてるなんて。

「こんな1日を後何回繰り返ししたら人生は終わるんだろう、そんな事を思って生きてる。そんな毎日は不毛だし、無意味だけど……」

そう、まさにそんな感じの毎日。

まさにそれを、私も感じて、生きてるの。

「そう、そうなんだよね。私が意味のない事ばかり考えて、ただ時間が過ぎるのを待つてる、その連続の日々がずっと続いて、人生が過ぎていくなら…そんな人生に意味なんてないよねえ。それなら生きてても死んでても同じだし」

「ほんと。生ける屍と同じだね」

彼も私に同意して言った。

重い話なのに、酔いのせいで少し楽しそうに見えるのが奇妙だ。

実際、私は時々酷く憂鬱になる。そんな時は死人のように横になって動けないでいる。ある日はお香の煙が流れるのを何時間もただ見ていた。ずっと、ずっと。

意味のない時間を意味もなく過ごし、意味のない1日が終わるのをただただ待ち望み、そしてそんな日々が終わる日をただひたすら待つ。

この無意味さは、永遠なのだろうか？

つまり、私が死ぬまで続くのだろうか？

それだったら、絶望だ。

余りにもひどい絶望。

「フツーの人達は何でこの無意味な毎日に耐えられるのかなあ？どうしてそんな大きな絶望に耐えられるのかなあ？本当に謎すぎ」

「あー…そうだね、謎だな。確かに。…彼らは無意味さに気づいていないのかもしれない。それとも、彼らの人生は無意味じゃないのかも。どっちにしろ、それは幸せだね」

「でも、私の人生には意味なんてないんだよね」

「僕にもないんだ」

「あはは」

ちよつとだけ笑う。自嘲的に、自虐的に。

彼も笑う。

今日初めて出会った彼は、今までのどんな友人よりも私に近い位置にいる人だった。

もう、何も要りません。

これは奇蹟だろうか。
惨めな私への、奇蹟？
私は嬉しかった。

とてもとても、嬉しかった。
私に近い、私と似た彼と出会えて。
そして話し、仲良くなれて。

そこへ、飲み会帰りらしいサラリーマン達が通りがかった。

「おーいいねえ〜若いモンは！可愛いカップルだねえ〜」

「これから夢がいーっぱいの人生が待ってるねえ〜。オジサン達は夢なんかとつくになくしちゃったよお。ねえ、オジサンに夢売ってよ〜」

あはははは、と連れのオツサン達も楽しそうに笑う

私の苦痛を知りもしないで。

私から見たらオツサン達のがよっぽど夢もあるし幸せに見える。

フツ〜の人達なんだから。

ねえ、味わってみる？私の生活を。

そこにある苦痛を。絶望を。

その時、ユウがオツサン達に向かって、相変わらず穏やかな口調で言った。

「ねえ、あなたのケツに僕の絶望の半分でもぶち込んであげようか？そしたら多分、あなた自殺するよ」

穏やかな言い方が逆に怖さを感じさせる。

オツサン達は興ざめたような顔と、怯えの混じったような顔をしてそそくさと立ち去った。

『キれる17歳』なんてクソダサイ言葉が流行ったおかげで、我々高校生というものはオツサン達にとって、欲望の対象であったり、羨望の対象であったり、見下す対象であったりすると同時に、一触即発の危険な存在でもあるらしい。

もう、何も要りません。

「ユウすごーい！」

私はパチパチと手を叩く。

ユウはまた微かに笑う。

でも、ユウの言った、『僕の絶望の半分』は、オッサン達には想像もつかないような、本当に自殺する程の、強い絶望なんだろう。

それは、本当に手に取るように、リアルに分かった。

だから、私は悲しかった。

彼の微かな微笑みも、余計に。

私達はそれからも飲んだり話したりして、終電ギリギリになってようやく帰る事にした。

駅までの道は二人ともダツシユして、でも酔ってたからよろよろして、それでまた笑って、余計によろめいて。

今日はバカみたいに楽しかった。

もっと彼と仲良くなりたい。

そしてもっとバカみたいに楽しく遊べたら。

それは希望。

また屋上で会おうね、と約束して、ユウと別れた。

家に帰ると、相変わらずママは色々と言ってくる。

でも、今日はそれも気にならない。

ユウと友達になれた事が嬉しくて、頭は酔いで回っていたから。

ママを適当にやりすごして、自分の部屋へ入る。

ベッドに倒れ込むようにして眠りに落ちる瞬間、ふとユウの絶望について考えた。

彼の絶望…それは、どんな事なんだろう。

何となくだけれど、それは私の絶望と似ている気がした。

…それは、とても悲しい一致。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

そして、翌日から私達は急速に親しくなった。

あの出会った時の薄汚い空がそれを約束していたかのように。

私たちは割れたクッキーの欠片同士のように気が合った。

私は彼が何年何組か知らない。別に聞く必要も感じなかったし。

彼も私にその事を聞かなかった。

彼も私も、授業をさぼっては屋上に行き、たくさんたくさん、話をした。

雨ざらしになって薄汚れた汚い屋上。

そこが二人だけの楽園だった。

第二話に続く。

もう、何も要りません。 2

第二話

ユウに出会う前、私一人だけだった頃は、入り口（兼出口）の扉と、その上に貯水槽のタンクが設置された、倉庫のような建物の壁にもたれて、体育座りで目を閉じて、iPodから流れる音の中に浸っていた。

大好きな音達の中で、一人で、静かに。

ユウと屋上で会うようになってから、私達はそこら辺に座って話をしたり、二人で音楽を聞いたり、ただ黙って座っていたり、鉄柵にもたれて空や校舎を見たり、そんな感じで楽園の時は流れて行った。

「ねえ、どうしてユウは屋上の鍵、作るうと思ったの？」

ある日、ユウと一緒に鉄柵にもたれながら、そう言えばどうして彼も合鍵を作ろうと思ったんだろう、と疑問に思い、聞いてみた。

しばらくの、沈黙。

沈黙の間、ユウの横顔を見ていたら、何だか彼が今にも風景の中に溶けていって、そのまま消えていってしまいそうな気がした。

彼は、そんな希薄さと透明さの中にいるんだ。

無意識に、私は彼の制服の裾を掴んでいた。

彼が空気の中に消えてしまわないように。

それからユウは小さな声で、答えた。

「屋上なら、誰も来ないから一人になれるし…空を広く見れるし、下を見下ろすと何だか少し楽になるような気がして」

ユウの髪の間を風が流れる。

薄い茶色の髪の間を、風が。

醜いはずの彼が美しく見える。

いよいよ彼が儚く見える。

もう、何も要りません。

そしていよいよ私は不安になって、裾を掴む手に力が入る。

「ハナは？」

ユウが問い返す。

ああ、いつものユウだ。希薄さも透明さも無い、現実のユウ。

大切な大切な、クッキーの半分。

このまま消えてしまったらどうしよう、と私は本気で心配で、怖くて。

だからひどく安堵して、大きくため息をついた。

そして、掴んでいた彼の制服の裾を離して、私は鉄柵に頬杖をつく。

見上げる空は曇天模様。

「私は…私は一人になりたくて。完全に誰も来ない場所を探して、屋上に辿り着いたの。ここなら鍵がないと入れないから。先生達もここは見回っていないみたいだし。ここで私は……ただ泣いたり、ぼーっとしたり、そんな感じで過ごしてた。後はユウと殆ど同じかなあ。この一人の空間は、世界全部でもあるし」

ここから見えるのは、第二校舎と第一グラウンド、それに空。上を仰げば、空。

都会の空は薄汚く曇っていたり、時々その汚さが嘘のように、綺麗に青く晴れたり、雲は白かったり。

空は完璧だ。

そう言ったのは、誰の言葉だったろうか。

限られた屋上のスペースで、限らない空間を私達は持つ。

「ここは静かだしね」

ユウが言う。

「うん」

私も同意して答える。

校舎から聞こえる音楽の授業のピアノや、グラウンドでの体育の歓声が、とても遠くから聞こえるようだった。

実際はそれ程遠くないのに、それがほんとに微かに聞こえて。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

「ここは天国に一番近いかもしれないねえ」

私はそう言つて、頬杖をついたまま目を閉じた。

ユウは私のセーターの裾を掴んでいる。

「どうしたの？」

「ああ、ごめん。…なんだかハナが消えそうに見えて…怖かったんだ」

思わず笑みが浮かぶ。

本当に、私達は良く似ていた。

風が少しだけ吹いていて、冷気が冬を感じさせるある日。

「ねえ、ユウがこの世で一番好きな音楽って何？」

汚い屋上の床に制服が汚れるのも構わず寝転がりながら、私はユウに聞いた。

「私はねえ…クラシックなんだ。パッヘルベルのカノン」

「僕は…どうだろう、ベートーベンの第九かな」

彼も隣に寝転がったまま答えた。

「あ、私も好き。聞いたのはアニメの挿入歌でだけだよ。でも、確か結構残酷な詩だったよね？この世に友人と呼べる者がいない者は、泣きながら天国の門を去るがいい、って」

「じゃあ僕たちはいつでも天国に行けるねえ」

まっすぐ空を見つめながらユウが静かに言う。

「…うん、行けるよね。私達」

空は高く、青く、寒く、冷たく、優しく。

「ねえ」

空はとても綺麗で、私は馬鹿だから、思わず聞いてしまった。

「自殺しようとした事ってある？」

私は、ほぼ毎日、そう思っている。

でも出来なくて、死ぬのはやっぱり怖くて、明日は死のう、明日は死のう、そう思いながら情けなくも毎日生きている。

ユウはどうなんだろう。

彼の顔を見るのが何となく出来なくて、私は空を見つめたまま。そして、彼も空を見つめながら答えた。

「何度も、何度もある。…でも、なかなか踏み切れないんだよね。

死を無意味に美化する気はないけど…、僕は、死は、優しいと思う」

死は、優しい。

優しい。

その表現は、ひどくびつたりな気がする。

死は怖い、そう思っていたけれど。

ああ、死は優しいかもしれない。

だって、私はそれによって、永遠に生きる苦痛を失うのだから。

優しい、死。

そう教えてくれたユウを、また少し身近に感じた。

「うん、私もそう思う」

短く答えて、そのまま二人とも無言で寝転がっていた。

焼却炉からの煙が高く高く登って行くのが見えた。

ある日、二人で食事兼軽く飲みに行った。

勿論、今度はちゃんとしたお店で、私服で。

その帰り、駅までの道にある川沿いを二人で歩いた。

酔ってほてった頬を、冷たい風が撫で、通り過ぎて行く。

駅までは20分くらいだろうか。

駅までの道には小さな川があり、その川はいつも生臭い臭いがしていた。

川である以上、いつかは海へと着くのに。

磯の匂いなんてなくて、ただ、生臭かった。

二人とも少し酔っていたのかもしれない。全く酔っていなかったのかもしれない。

「私、ウリやつてるんだ」

もう、何も要りません。

所謂、援助交際だ。

身体に過剰な価値があるのは高校生のうちだけ。

自分でも何故突然こんな事を打ち明けたのか分からない。

余りにも川が生臭かったからかもしれない。

私がウリをやっているという事は、今まで誰にも言った事がなかった。

別に誰かに言う必要もなかったし。

「そうなんだ」

そう言つて一瞬の沈黙の後、彼は言った。

「僕もやってるんだ」

私は彼の言葉の意味が分からず、バカ面をしていたと思う。

その後彼は続けて言った。

「僕、ゲイなんだ」

「そうなんだ」

内心かなり驚いていたけど、私は出来るだけ平静を装つて言った。
ゲイって事は所謂ホモ、って事か。

「クルージングって分かるかな、ウリする男の子がいっぱい待機してる店で、ウリ専とも言っただけ。で、そこにオッサンとかが買いに来るの」

「そうなんだ」

私はまた同じ言葉を繰り返した。

クルージング。初めて聞く単語。

そこで、ユウもウリをしているんだ。

ウリ。

体を、売る。

私達。

川を通り過ぎ、商店街に近づく。酔った大学生らしき集団が道ばたに座り込んでいた。その脇を私達は無言で通り過ぎる。彼らの騒がしさが私達と対照的で面白かった。

「私ね」

もう、何も要りません。

最初に口を開いたのは私だった。

「ウリやってるよね、嫌な目にいっぱい遭った。オッサンとか気持ち悪いし。クソみたいな説教されたり、クズみたいに扱われたり。でもね、やめられないの」

そこでユウが私の言葉を継ぐように言った。

「僕も、今までいろんな目に遭った。男同士だし、ほんとに命の危険を感じるような事もあったよ。でも、僕もやめられない。ハナと同じに」

それきりまた二人とも黙って駅まで歩き続けた。

私達は本当にクツキーの欠片同士のように気が合ったのだ。

第三話に続く。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。 3

第三話

今日の天気予報は晴れ。

だけど、恐ろしく風が強くて寒い。

屋上に行くと、物凄い風が吹き抜けている。

今日は飛び切り寒い。

「寒いね。寒すぎる。あり得ないくらい寒い」

私は両腕で体を抱き締めながら言う。

「ほんとに。今日は『屋上日和』じゃないなあ」

ユウも寒そうに言う。

「屋上日和って」

思わず笑いながら繰り返し、続けて言った。

「今日はフツーに授業受けるしかないっばいね。帰りに遊びに行く」

「そうだね。じゃあ、校門で待ち合わせよっか」

「うん、そうしよ」

いくら二人の楽園でも、びゅうびゅうと風が音を立てて吹き荒れてているようでは、落ち着いて過ごすなんてとても無理。

授業が終わって校門に行くと既にユウはいて、私達はそのまま駅前に行く事にした。

駅前には駅ビルもあって、学校の近くにしては栄えてる。

いちじくのクリームをはさんだパンが人気のパン屋さん。

シックだけどバカ高い喫茶店。

ギャルい服を売ってるセレクトショップ。

パチンコ店。

そんな商店街を抜けると、デパートや予備校、カフェバーとかが連なる中心地となる。

もう、何も要りません。

そしてその少し外れに公園があつて、住宅街が続くようになって
いる。

「そついや、ハナの家つてここら辺つて言つてたよね」

ユウが言う。

「うん。寒いからお茶でも飲んでくつて言いたいけど、うち両親
が離婚して、母親はアル中で。それが嫌だから私、なるべく家には
遅く帰るようになつてるんだ」

ちよつと笑いながら答えた。これも初めて人に話す事だつた。

笑顔はうまく出来ただろうか。

重い事を重くないように言うのは難しい。ましてや、シラフで。

「そつか」

ユウの横顔は夕日で赤かつた。

予備校の生徒らしき男の子たちが笑いながら側を通り過ぎた。

私達は無言でそれを見送る。

彼らの苦しみはなんだろう。受験？

それとも人知れず苦しみ耐えているのだろうか？

その苦しみは、私よりも大きいのだろうか？小さいのだろうか？

「苦しみつていうのは、どうやって耐えて行けばいいんだろうね」

ユウは、私に向かって言つてるような、自分に向かって言つてる

ような感じで、小さく呟いた。

冷たい風が吹いて、私の短いスカートの中を吹き抜けて行つた。

太ももが冷たい。

「ただ、ただ、慣れて行くしか、ないのかな。それが、通り過ぎる

まで」

「…でも、慣れる事の出来ない人は？」

「…うん」

私はただ、頷く。

私達は、知っているから。

その答えを。

私達だけが、分かる答え。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

目の前には、5万。

福沢諭吉の描かれた紙が5枚。

これが私の1時間半の価値。

今日のおヤジは羽振りがよかった。

最近不景気なのか、女子高生の価値が下がったのか、ウリの相場は2〜3万くらい。

たまに7万くらいくれるイイヒトもいるけど。

この紙、どうしようか。

特に欲しいもの…今は何もないや。

おヤジは先に出て行って、私はラブホの部屋でただその5枚の紙を見つめる。

体中についたおヤジの体臭が気持ち悪い。

洗い流したい。すぐにでも。早く。早く。

でも私はお風呂には行かずに、その気持ち悪さの中、ベッドの上で横たわる。

気持ち悪さを噛み締めながら。

わざと、気持ち悪さの海に自分を突き落として。

ああ。

あああ。

あああああ。あ。あ。

もう少し。あと、もう少しだ。

ハナがホテルで横たわっている間、ユウもクルージングの店でオヤジに選ばれていた。

彼は店の売れっ子だった。

ホテルでコトを行う時、ユウは何も考えないようにしている。

僕はただの肉塊。

感情なんか無い肉塊。

沸き上がるこの嫌悪感は、ただの脳内の電気信号。

シナプスとシナプスの間を走る脳内伝達物質。

そう言い聞かせつつ、体を売る。

そんなユウを、突然、客はぶん殴った。

一瞬、ほんの一瞬だけ苦痛にゆがむユウの顔。

それを見て客は満足げに気味の悪い笑みを浮かべた。

コトが全て終わり、彼の目の前には2万円。

ユウは思う。

あいつのパンチは痛かったな。少しだけけど。

鏡を見ると、口が切れて血が出ている。頬も少し腫れているよう

だ。

これで2万は安いと思うけど。

でも今、何か欲しいもの…特にないな。

じゃあ、まいつか。

ああ、もう少し。もう少し。

もう少しだけの辛抱だ。

2人の不思議なシンクロ。

次の日、ユウは屋上に来なかった。

風邪でもひいたのかな。最近寒いし。心配だな。

明日は来るといいな。

もう、何も要りません。

翌日の授業中、教室の窓から下をぼんやりと眺めていたら、遅刻

して登校するユウの姿が見えた。

良かった。今日は屋上に来てくれるかな。

もう、何も要りません。

私が2時間目に屋上に行くと、ユウはそこにいた。彼は、屋上の柵にもたれてグラウンドを見ていた。

「ユウ」

後ろから声をかけると、彼は無表情で振り向いた。

その無表情さは、凍てつくような鋭さで、私は一瞬寒くなった。

口の横には絆創膏が貼ってある。どうしたんだろう。

「ハナ。おはよう」

無表情のまま、彼は言った。

「おはよう」

それきり、かける言葉が思いつかなくて、私も柵にもたれてグラウンドを見つめた。

体育の授業で男子がハンドボールをやっている。

騒がしい叫び声は遠くて、下界（ほんとにこの表現がぴったりだと思う）とここは、余りにも空気が違う。

「…一昨日、またウリしたよ」

ユウがぼつりと言った。口の傷はその時のもの？

「私もしたよ」

「いくら貰った？」

「5万」

「やっぱり、女の子の方が価値があるね。僕は2万」

「そうなのかなあ。最近は女子高生も不況っぽいよ」

また、無言。沈黙。

なんだか、今日のユウは雰囲気が違う。

近寄りがたくすら感じる。

「ねえ」

私の方を見もせずに、彼が問いかけた。

「…アタマって、いつオカシクなるのかなあ？」

彼の言葉が音になって、耳に入り、脳に届く。

そしてその意味を解釈した時。

私は、硬直した。

アタマが。

オカシクなる時。

そうか。

やっぱり、ユウは私と同じ理由でウリをしていたんだ。

絶望のどん底に落ちて、アタマがオカシクなって、自殺でもなんでも、簡単に適当に出来るようになる為に。

アタマがオカシクさえなれば、死ぬのなんか怖くなくなるはず。

その為に、私達はウリを続けているのだ。

とことんまで自分を痛めつけて、地に落として。

そうして、死ぬ為に。

苦痛から逃げる為に。

今日、ユウの様子がおかしいのも、納得がいった。

彼は、アタマがオカシクなるのを待つのに疲れたのだ。

そして、そんな日々にも。

そして、私ももういい加減疲れていた。

彼も私も、弱い弱い、人間なんだ。

苦しみも、悲しみも、耐えるのはもう限界だった。

「助けて……」

小さな小さな、聞き取れない程小さな声で、ユウが呟いた。

その後、もう少し大きな声でまた繰り返した。

「助けて」

「僕はもう、限界だ。もう、耐えられない。もう、ウリなんかしたくない。もう、何もしたくない。もう、何も考えたくない。もう、動きたくない。もう、生きていたくない。もう、何もかも無理なんだ。でもまだ、死ぬ勇気がない。まだないんだ。そんな情けない僕は、一体どうしたらいい？どうしたらいい？教えてよ！どうしたらいい？」

いつも穏やかなユウが、感情をぶちまけて、叫ぶようにまくしたてた。

痛烈な思いに、声が震えている。

もう、何も要りません。

頭をかきむしるように抱え込み、彼はもう一度、最後の言葉を繰り返した。

「…どうしたらいい…」

私は、そんな彼に何も言えなかった。

何も言える言葉がなかった。

私も同じ思い。

でも、答えはなくて。

どうしても、それへの答えはなくて。

本当に、一体どうしたらいいんだろう。

一体、どこに救いはあるんだろう？

私達みたいな人間はただ、苦しみに耐えるしかないの？

死ぬまで、その苦しみに。

「一緒に、いるよ」

「私が、一緒にいる」

なんとか出てきた言葉は、余りにも曖昧だった。

俯いて床に座った彼の隣に正座して、彼の手を握った。

その手は消えてしまいそうに軽かった。

そのまま、どれくらい経ったんだろう。

今、お昼くらいかな。

「オナカ、すいたね」

何気なく私がそう呟くと、彼はぶつと吹き出した。

余りにもものんきに聞こえたのかな。

でも、おかげで今日、初めて彼の笑顔を見れた。嬉しい。

「すいたかも。何か食べに行こうか。もう学校はさぼって」

私達はこっそり学校を抜け出して、お昼に出かけた。

お昼は美味しく、私も彼もいつも通りに話し合う。

でも、私はどうしてもさっきまでのユウが気になって。

あんなにまで追いつめられて苦しむユウが悲しくて。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

「ユウ」

「ん？」

「…私、あんなユウ初めて見たよ」

「あんなに、限界まで我慢しないで。私、ほんとに何も出来ないけど。側にいる事とか聞く事しか出来ないけど。でも、それでも、少しでも楽になるかもしれないし。だからお願い。辛かったら、私にぶちまけて。全部。全部。楽になるまで」

感情を剥き出しにして苦しむユウ。

座り込んで、動かないユウ。

そんな彼の姿を見た今日、彼が余りにも不安定で、ギリギリのところでは何とか生きてる状態なんだって、今更ながら思い知った。

無力な私だけ。

本当に、ちっほけだけ。

ユウの力になりたい。

心底、そう思った。

「ありがとう…」

ユウは嬉しそうに、照れたように言った。

「でも、ハナも。ハナも、辛い事とか、僕にぶちまけて。ハナも、絶対に溜め込まないで。約束」

そして、私達は小さい子みたいに、指切りげんまんをした。

二人とも、少しだけ笑顔になった。

第四話に続く。

もう、何も要りません。 4

「ハナ！早く起きなさい！」

朝、ママの声で目が覚めた。

「全く怠け者なんだから！起こさなきゃ起きやしない。あの男とおんなじ！」

パパの事だ。離婚した、パパ。

「あたしはもう出かけるからね。急いで起きて学校行きなさいよ。さぼるんじゃないわよ！」

ママは一応、縁故のツテで勤めに出ている。

朝っぱらから働かない頭に、ママの怒鳴り声。

『あの男とおんなじ』

パパとおんなじ。

思い出す。

昔の事。

あ。

ああ。

あああああ。

ああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああaaaa

a、あああ。

あたしはベッドに横たわったままにいる。

頭には何もなく、何も考えられない。

体は動かない。

動かす気力がない。何も出来ない。

気分がすごく下にある。このままどこまで落ちるんだろう。

死にたくて、死にたすぎて、胸が苦しい。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

ただ、息を吸い、吐くという動作がものすごく辛い。

憂鬱感とともに目を閉じると、地下にどんどん沈んで行きそう。

私には生きる価値がない。

私には何の価値もない。

私は死ねばいい人間。

なのに何で生きてる？

胸が苦しい。

く

る

し

い

。

そんな思えばかりがぐるぐると巡る。

希望なんか全くない。あるのはただ、絶望。

徐々にアタマがオカシクなってるのかな。

このまま、完全にオカシクなればいい。

早く、早く。

苦しいの。苦しくてとても堪らないの。

ベッドに横になって、ただ死を夢想する。

死ねやしない、わかってる、でも。

ただ現実が続く。

いつになったら私は楽になるんだろう。

助けて。

誰でもいいから。

苦しい。

苦しいの。

その時、ふとユウの顔が思い浮かんだ。

何も考えられない頭に、彼への愛情だけははっきりと思い描けた。

ユウ。

ユウ。

絶望でいっぱい頭に、少しだけユウの事を考える。
横になったまま、彼と話した事や彼と過ごした事を思い浮かべる。
ちよつとだけ、楽になったような気がする。

このまま目を閉じよう。

この隙に、目を閉じて眠ってしまおう。

このままずっと、目覚めなければいいのに。

あり得ない事だけど、眠る度にいつもそう願う。

このまま死んでしまえますように、って。

目を閉じたまま、永遠に眠れますように、って。

「おはよ、ユウ」

次の日は普通に学校に出かけられた。

お昼に屋上に行くと、ユウが来ていた。

「ハナ、昨日来なかつたけど、風邪？大丈夫？」

指切りげんまん。

約束。

「あのね…物凄い、鬱で。動けなかつたの。昔の事とか、思い出して」

「ママに罵られて、辛くて辛くて。死にたくて。苦しくて。でも、ユウの顔思い浮かべて、そしたらちよつとだけ楽になったの。それで、その隙に寝て、起きたらだいぶマシになってた。今日はフツ―に大丈夫だよ」

こんな話を他人に出来る日が来るなんて思ってもみなかった。

ユウに昨日の出来事と、その絶望感を話すと、少し楽になった。

「ハナ、お母さんがアル中だつて言つてたよね。お母さんは、ハナを罵つたりもするの？」

「…うん…」

「暴力とかは？」

「小さい頃はよくされたけど…大きくなってからは言葉の暴力にな

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

った」

「そっか…辛いよな、親に罵られるなんて。体の傷よりも、ずっとずっと苦しいし、悲しいよね…。ハナ、よく今まで一人で頑張ってきたね。辛かったね」

「うん…」

私はやっぱり馬鹿で弱いから、ユウの優しさに涙が溢れた。

そして子供のようにユウにすがりついて、泣いた。

ユウはそのまま、『いいいいこ』と頭を撫でてくれた。

私はずっとママにしてもらいたかった、『いいいいこ』。

私はますます泣いて、泣いて、泣きまくった。

そして、泣きつくしたらなんだか妙にすっきりして、晴れ晴れとした気分になった。

涙を拭って、私は無理矢理に笑う。

「…でも、しょうがないんだよね」

しょうがない。

しょうがないんだもの。

私がママの娘である事も、ママがアル中である事も、ママが私を罵しり責める事も。

そこに生まれて来てしまった以上、しょうがない。

「しょうが、ない、のかな…」

そう呟いて、何か考えるようにユウは床を見つめている。

「ユウ、どうしたの？」

「ん？ああ、ごめん。何でもないんだ」

「そうなの？…なら、いいんだけど」

どうしたんだろう。

ユウは、何か、考えていた。確かに。

ある日の学校帰り、私達はユウの家に寄る事にした。

ユウの家は15階建ての分譲マンションで、部屋は10階にある。

廊下から下を見るとすごく高い。落ちたら死ぬのかな。死ぬんだろ。痛いのかな。

その時は、怖いのかな。

家には誰もいなかった。

3LDKが異様に広く感じる。家具が余りない。

「家の人って仕事中心？」

通されたりリビングのソファに座り、ユウが何気なく聞いたら、ユウは微かに微笑む。

それは、出会った時の、あの微笑みだった。

そして言った。

「お母さんは男と出て行ったんだ。お父さんはリストラとそれが重なって首を吊った。妹はお父さんが自殺する前に、殺されてたよ。道連れが欲しかったんだろ。うね」

さらりと壮絶な話をするユウ。

ああ。

この微笑みには、とてつもない量の感情や、言葉や、叫びが押し込められているのか。

だからこそこんなにも悲しくて切ないのか。

「…僕って、家族にとって何だったのかな。お母さんは僕たちを捨てた。お父さんは妹を道連れにして殺したけど、僕は生かされて、普通に寝てたよ。睡眠薬でも飲まされたんだろ。うね。お茶か何かで起きたら…リビングは血まみれで、妹が横たわってて、風呂場ではお父さんが…」

そして彼は、また穏やかに微笑んだ。

しばらくの沈黙がまた続いて、私は口を開いた。

少し声が震える。

「…私のママ、アル中だつて言ったよ。よく罵られたりするって。それね、私、生まれてすぐパパが愛人作ってさ。物心ついた頃には家はどろどろだった。ママはそれからアル中になって、酒を飲んでパパが帰ってくる度にそれこそ命がけの喧嘩をしてたよ。ママがパ

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

パに包丁を突きつけたり、パパがママの髪をつかんで壁に殴りつけたり。それに割って入って泣きながら止めるのは必ず小さい私で。私は夜が来るのがすごく怖かった。ママはよく自殺未遂をして、それを見つけるのも大抵私で、恐怖と心配で死にそうだった。ママに無理矢理水を飲ませて、指を突っ込んで吐かせたり、お医者さんに電話したり、それを小3くらいの私がするの。しばらくするとおばあちゃんとかが来てくれて、それでやっと私はやっと安心出来て…私が小5の時にね、やっとパパとママの離婚が成立して、『ああ、もうあんな思いはしなくていいんだ』って安心したけど、でも『もう二度とパパと朝ご飯と一緒に食べたり出来ないんだなあ』って思うと寂しかった。でも、私はこれで平和になる、そう思ってた。でも、私に寂しかったの。でも、それから地獄だった。私はパパ似で、でもそんなの遺伝子のせいで私のせいじゃないのに、ママはいつもそのことで私を責めるようになって。『あんな男に似やがって』とか、『お前なんか産まなきゃ良かった、墮ろせばよかった』とか『今すぐ死ねばいいのに』って。それで、こないだも泣いてたの。親に存在価値を否定された子供って、生きてる意味があるのかな…。今頃、ママ、家でお酒飲んでるんだと思うと帰りたくない。帰りたくないよ…』

私は、彼の壮絶な体験に対して言うべき言葉が分からなかった。

私は、彼の壮絶な体験に対して自分の傷も披露する事しか出来なかった。

昔を思い出したのか、話をしながら怖くて足がガクガク震えて、何となく寒くなったような気すらして、両手で体を抱きしめながら話した。

私は、彼の傷に対して、自分の傷も曝け出して、舐め合う事しか思いつかなかった。

それが正しい答えだったのかは分からない。

もっといい答えがあったのかもしれない。

でも私にはそれしか出来なかった。

もう、何も要りません。

それしか出来なかつたんだ。

そう思つて震える体を抱きしめながら私は無理に微笑む。

ユウのあの微笑みを出来るだけ真似して。

「しょうがないよね」

そして私はまたその言葉を言う。

しょうがない。

しょうがないんだ。

どれだけ苦しんでも悲しんでも、どうしようもない事、それは必ずあるから。

だから。

「しょうがない、のか」

「しょうがない。しょうがない、」

「そうだね、しょうがない」

ユウはその言葉を繰り返して、しばらく俯いた。

それから顔をあげて、ゆっくりと微笑んだ。

ああ、この微笑みは諦観の笑みだ。

全て諦め、全て受け入れ、地獄を見た者だけが出来る美しい微笑みだ。

もしかしたら、諦観は、全ての感情の中で一番美しいのかもしれない。

「…うん、しょうがないんだよ」

私は彼の手を握つて、言った。その手は優しく、温かかった。

もう、何も要りません。 5

第五話

その日、母親はまたも醜く酔っぱらい、私に因縁をつけてきた。そしてまたお決まりの言葉を吐く。

ろれつの回らない、醜い喋り方。

醜く理性をなくした姿。

まさにアル中そのものの、姿。

「お前なんか墮ろせばよかった…なんで産んじやっただら。お前みたいなクズ」

「…死ねばいいのに！」

存在価値の全否定。

それを実の母親から言われる私。

ママはいつから私をこんなに激烈に罵るようになったんだろう。

記憶には霞がかかって朧げにしか思い出せない。

そんな考えもすぐにママの怒鳴り声でかき消された。

「いつもいつもぼんやりして気味が悪いったら！」

私、ただ立つてあなたの怒鳴り声を聞いているだけだよ。

それが、気味が悪いの？

どうして、いつから、どこから、私達はこうなったんだろう。

私の存在を作り出した張本人がその存在価値を否定したのに、私と言う存在は消えない事が不思議だった。

否定されたその瞬間、存在自体も消滅してしまえばいいのに。

人間てなんて厄介なんだろう。

これが陶芸品とか例えばそんなものなら、叩き壊して全てが終わるのに。

「あーもうお前の顔見てるだけで寒気がする！消えて！あたしの前から！」

もう、何も要りません。

ママにそう言われて私は2階の自分の部屋に帰った。
外界から遮断してくれる薄いドアを静かに閉じて、私は柔らかな
ソファに倒れ込むようにして座る。

深いため息。

安堵じゃない。

疲れと、絶望のため息。

何故だか机の下にもぐりこみたくて仕方なくて、だけど本当にも
ぐりこんだら、余りにも居心地が良くて、もう二度とそこから出て
来れなくなるような気がしたから、私はその意味不明の衝動を抑え
ようと戦う。

だけどそんな意味不明なことを考える自分が馬鹿みたいで、少し
だけ笑った。

ママは私を嫌っている。

憎んでる、と言ってもいい程に。

それはどうしてだろう。

私がパパに似てるから？

私の頭が悪くて、世間に自慢出来るような娘じゃないから？

ママとパパがまだ一緒に住んでいて、私を可愛がってくれた微かな
記憶。

その記憶はほんの10年前くらいのものなのに、想像もつかない
程昔のように感じる。

隙あらば私にケチをつけようと待ち構えてでもいるようなママ。
そして私は罵られ、否定される。

逃げ出したい。

こんな苦痛に耐えて耐えて耐えて耐えて耐えた6年間。
限界だ。

もう、こんな苦界で生きる事に耐えられない。

でも、それでも未だに私は『もしかして、いい子にしてたらいつか
ママが愛してくれるかもしれない』という望みを捨てきれないで
いる。

もう、何も要りません。

情けない。

こんなに傷つけられてるのに、私はまだ、希望を、望みを捨てられず、私を憎み続けるママを、私を疎ましく思うママを、ママに、愛して欲しくて欲しくて欲しくて欲しくて欲しくて欲しくて。

母親の、愛情。を、求めている。

たとえママが私の存在を全否定しても。

たとえママが私を産んだ事を後悔していても。

『お前なんか堕ろせばよかった』

ママの言葉が蘇る。

中絶。

胎児の頃に消し去れば良かったと思う？

それなら、それなら。

本当にいつそ消して欲しかったよ。

消さなかったのなら、今更戻らない過去を私に押し付けしないで。

『お前なんか堕ろせばよかった』

何度も何度も言われ続けた言葉なのに、何故私は慣れる事が出来

ないんだろう？

何故毎回毎回苦しいんだろう？

何故毎回毎回悲しいんだろう？

そして、泣くんだろうか？

喉の奥に小さな空気の塊のようなものがつまって、涙が後から後から溢れる。

「う……う……」

私は、今までの経験上、余り声を出さないうで泣く事が出来る。

何の自慢にもならないけどね。

ああ、明日は目が腫れちゃうな。

目の様子を見ようとドレッサーの鏡を見て、ふと自慢の綺麗な長い髪を束ねて、頭の上でまとめてみた。

私は立ち膝のまま、しばらく鏡を見つめていた。

もう、何も要りません。

それから急に、机の引き出しからハサミを取り出した。そして、まとめた髪の毛の根元を、ざっくりと切った。髪がばさばさと床に散らばる。顔にも髪がくっついて、くすぐったくて鬱陶しい。

それをイライラと払いのけて、また髪を切った。適当に、無茶苦茶に。

不思議な、爽快感。

一つハサミを入れる毎に何となく心がすっきりするよう感じる。多分、錯覚なんだろうけど。

それでも私は切り続けた。

ざく、ざくというハサミの音が軽快で心地良い。

その音にまかせて、無我夢中で切り続けた。ねえ。

愛していないなら、いらぬなら、

無惨なおかつぱ頭になったところで、ざくざく言う音にも、髪を切る感触にも飽きて、ハサミを持って余した。

いてもいなくても同じ存在なら、

そのハサミの刃で、腕を切ってみた。全然切れない。

筆箱からカッターナイフを探し出して、それでまた腕を切ってみる。

だいぶ力をこめているのに、なかなか切れない。

人間の肉って切りにくいんだな。

消えても何の問題もない存在なら、

ようやく一筋、傷が出来て血が滲む。

それを見たら、何だかふっ、と心が楽になるのを感じた。嬉しくなって、私は飽きるまで腕を切り続けた。

パツクリ開いた傷口の奥に白いものが見える。肉かな。あれを切ったら脂肪とか静脈に達するんだろう。でもそこまではしなかった。深さ2mmくらいの浅い傷を沢山作った。

腕や手首に、傷口からの血を塗り付けて、それは少し冷たくて、

もう、何も要りません。

少し楽しかった。

そして、気持ちも少しだけ楽になったように感じた。すつきりして、私はふと周りを眺める。

血に塗れた右腕と、散乱した髪の毛で滅茶苦茶になった床。

それを見て、私は思わず少しおかしくなつて笑った。

ねえ。愛してないなら、いらぬなら、殺してよ。そんな勇氣、あなたにはないだろうけど。

でも、じゃあ、何で私を産んだの？この地獄に私を産み落としたの？

ドレッサーの鏡を見てみたら、その顔はユウの微笑みととてもよく似ていた。

ただ、不思議と私はまだ涙を流し続けていた。

もう少し、もう少し。

次の日。

あれから私はそのまま床で眠ってしまったって、起きてから部屋の掃除をして、お風呂場で髪を切り整えた。

さすがに無惨すぎたから。

切り終えてお風呂場から出ると、起きて来たママと出くわした。

咄嗟に私は右腕を隠した。

下着姿だったので、昨日切りつけた傷は丸見え。

傷をママに見られたくない。

見せたくない。

本当は髪も見られたくなかったけれど、それはしょうがない。

ママは一瞬、私の髪を見て驚いたように目を見開いた。

そして次の瞬間、鼻で笑った。

「自分で切った訳？また流行の髪型とか真似したんでしょ。そんな滅茶苦茶な頭がかっこいいとでも思ってるの？みっともない」朝イチでママの嫌味を聞く。

もう、何も要りません。

ママ。

かつこいいなんて思っ
てないです。ただ切り
たかったからです。

だから適当に切っただ
けです。

腕も切りました。

滅茶苦茶に切りました。

血塗れになりました。

少し痛かったです。

でも楽しかったです。

切り終わったら、気持
ちが少し、楽になりました。

あなたに傷つけられた
心も少し、楽になりました。

もちろん、アナタに理
解してもらおうなんて
思っ
てませんけど。

ママが出かけた後、私
は学校へ行く準備をし
ながらも、また涙が溢
れそうになった。

また、罵られて、馬鹿
にされて。

その時、右腕の傷が目
に入った。

ああ、昨日滅茶苦茶に
切った傷。

浅い傷や深い傷。

深い傷は当然、まだ塞
がってなくて。

その隙間に肉が見える。

血がゼリー状に固まっ
てるところもある。

そんな傷を見ていたら
、昨日のように、また
少し気持ちが楽にな
った。

不思議。

学校に着く。

学校は4階建ての建物
が二棟、連絡通路で繋
がっている。

その手前の建物の、一
番下の階の、下駄箱か
ら一番遠い教室。

もう、何も要りません。

そこが私のクラス。

「おはよー」

私は笑う。

「おはよ、ハナ：えー！？」

友達は私の髪を見て大声を出して驚いた。

それはそうだろう。

昨日まで胸までであった髪が突然短くなったのだから。

しかもその切り方は、明らかに素人の手によるものである事が容易に想像がつくものだったから。

「自分で切ろうと思ったたら失敗しちゃってさー」

適当に笑いながら話す。

友達もそれに合わせて軽口を叩く。

「失敗ってレベルじゃないでしょー、ちょっと」

「ハナ、不器用過ぎ！」

「案外アバンギャルドでいいかもよ」。デザイン系の専門学生みたいでさー！」

あはは、と一緒に笑いながら、あたしは思う。

今が冬で良かった。

夏だったら、昨日の傷が見えてしまう。

見せたくない。

彼女達にも、傷を見られたくない。

そう思ったから。

机の周りに集まって、ジョシコウセイの朝のおしゃべりの時間。

私は、笑う。

自分の社会適応の良さに感心する。

私は学校では完璧な『ジョシコウセイ』だった。

スカートを膝上15cmにあげて、紺のハイソを履いて、化粧をして。

先生の悪口を言ったり、他愛のない話に笑ったり。

もう、何も要りません。

何の悩みもない、あるとしたらレンアイのことで悩んでいる、普通の女子高生。

本当にそうだったら、どんなにいいだろうね。

1限目は好きな数学だったけど、保健室に行くと言って、私は屋上に行った。

今日の空は薄曇り。

貯水槽のある建物の壁にもたれて座る。

ここだけが、学校での私の居場所。

セーターの裾をめくって、ブラウスをひきあげて、昨日切った腕の傷を見た。

そんなに深い傷はないようだけど、ブラウスにはところどころ血が付いている。

愛しい。

この傷が愛しい。

私の代わりに悲鳴をあげてくれているような気がして。

ああ、そうか。

分かった。

だから、私はこの傷を、ママにも友達にも見られたくないと思っただ。

私の心の悲鳴。

その傷。

本当の私を表す傷だから。

傷をそつと撫でる。

指に少し、血が付く。

痛くはない。

私は傷を撫で続けた。

ああ。

穏やかだ。

静かに、ただ静かに。

もう、何も要りません。

落ち着いていく。

私は目を閉じる。

気持ちが無に近づく。

幸福であるとすら感じる。

ふふっ。

私は笑みを浮かべてまた傷を撫で続けた。

苦痛。

悲しみ。

絶望。

それを通り越した先にあるのは、ただ、穏やかさだった。

ゆったりと時は過ぎて、漂うように。

それは幸せと言ってもいいくらいの、穏やかな穏やかな気持ち。

何もかも、大した事じゃない気がするような。

そうか。

これが、諦観の境地。

どれくらいそうしていたのか分からないけど、扉が開く音がしたから、私はユウが来たのかと思って、扉の方を見る。

だけど、そこには全く知らない男の子が立っていた。

とっても綺麗な顔をした男の子。

ユウ以外にも、合鍵を持つてる人がいたなんて。

私は驚きすぎて、言葉が出なくて、無言のまま彼を見上げていた。

彼は私の髪と、腕を見て、驚いた声で問いかける。

「どうしたの、それ？」

え。

もう、何も要りません。

第六話に続く。

もう、何も要りません。 6

第六話

この声……。

「ハナ。どうしたの？」

返事をしない私に彼はまた話しかけた。
なんで。どうして。

どうして私の名前を。

この人は。

この声も。

ユウ？

どうして。

違う。

ユウの顔は、こんな顔じゃなかった。

私は確かに彼の顔を『醜い』と思っていた。今まで、ずっと。
でも、よく見ればパーツの一つ一つは確かにユウの顔。

なのに、どうして今までと感じ方が違うの？

何で、どうして。

どうしてどうして。

どうして。

二の句がつけない私を見て、不思議そうにしながらも、とりあ
えず彼は私の隣に座った。

あ。

もしかして。

そうだったのか。

私は。

全てに気づいた私は思わず大笑いしてしまった。
なるほどね。

もう、何も要りません。

ユウはもともとから綺麗な子だったんだ。類い稀な程綺麗な顔をして
いたんだ。

でも私と彼は友達になるべきだった。友達にならないければならな
かった。

だって私達はクッキーの欠片同士だったから。二人で一つの、ク
ッキーなんだから。

でも、私が彼を異性として好きになってしまったら全ては終わり
だった。

欠片は永遠に一つになれなかった。

欠片が一つになる為に、私がユウを好きにならない為に、出会っ
た瞬間に、私の脳は彼を醜いと認識したのだ。

でも、彼がゲイだと知った今、その必要はなくなった。私が彼を
好きになる事はない。

そして、私も諦観の境地を知った。

彼の、あの美しい微笑みの場所を。

そしたら彼を正しく認識出来るようになった。

私ってすごい。どうしてそんな事が出来たんだろう。

まあいい。そんな『どうして』はどこかの馬鹿な心理学者が考え
ればいい事だ。

とにかく、脳がそんな邪魔をするくらい、私と彼は直観的に一緒
だったんだ。

私はそれが嬉しくて嬉しくて、涙を流しながら大笑いを続けた。

ユウはきよとんとしながらかう私を見つめていた。

ひとしきり笑って泣いた後、涙をぬぐってユウに話しかけた。

「ごめんね、意味わかんないよね」

ユウはいつも通り、微笑む。

「ただね、ただ嬉しいんだ。ユウと出会えて友達になれて、嬉しい
の」

「僕も嬉しいよ。ハナがいてくれて本当に嬉しい。本当に、本当に」

もう、何も要りません。

朝、まだ9時半。早朝の清々しさはなくなっているけど、朝の空気が十分残っている。

冷気が気持ちいい。少し、傷にしみるけど。

「ところで、どうしたの、それ？」

ユウは私の頭と右腕を指して、最初の質問を繰り返した。

「ああ…。あのね、昨日またママに罵られたの。『お前なんか墮ろせばよかった』って。『目の前から消えて』って。何で何度言われなくても慣れないんだろうね。何で毎回悲しいんだろうね」

ユウは真面目な顔で私の話を聞いている。

「それでね、部屋に戻って泣きながら、ふと髪を切ってみたの。したらちよつとだけすつきりした。髪を切り終わって、腕も切ってみたの。なかなか切れなかつたけど、最初の傷が出来て血が滲むのを見たら、ふつて楽になつたの。それから、滅茶苦茶に腕を切っちゃつた。少し痛かつたけど、傷が出来て血が出て、それを見ると何故か気持ちが楽になつたから」

傷をゆつくりと撫でながら、言った。

風が吹く。

冷たい。

痛い。

気持ちいい。

ああ、またなんだか泣きそうだ。

その時、ユウが私を抱き締めた。

「どうして、ハナのお母さんは、ハナを傷つけるんだろう。どうしてハナは傷つけられなきゃいけないんだろう。ハナを傷つける権利は、誰にもないのに。ハナは大切な大切な僕の友達なのに。誰にも傷つけて欲しくないのに。辛い思いをしないで欲しいのに」

「ハナには生きてる価値があるよ、すごくすごくあるよ。僕はハナがいるから生きるのにギリギリ耐えられてるんだ。それはすごい事だと思う。一人の存在を支えてるんだから」

何の前触れもなく、突如として。

もう、何も要りません。

涙が溢れた。

すごい勢いで。

嗚咽が漏れる。

涙はますます溢れ出す。

私は久しぶりに、ものすごく久しぶりに、声を出して泣いた。

抱き締められながら、私はただユウの肩を涙で濡らし続けた。

真っ正面から、人から優しくされる事。

それはこんなに嬉しい事だったんだ。

真っすぐに、人から大切に思われる事。

それはこんなに幸せな事だったんだ。

「…どうして、親から否定される辛さを親は知らないんだろう」

ユウは、思い出すように言った。

「あの、事件？」

「…うん」

「…その時、誰も、手を差し伸べてくれなかったの？」

「警察の人が、精神科に行ってみたらどうかって言うてくれた。精

神科では薬をもらった。薬は、確かに効いたけど…」

静かに突然、存在を全否定されたユウ。静かに突然、致命傷を負

わされたユウ。

「私ね、自分の命よりユウが大切だよ。死ぬ程大事な友達だよ。ユ

ウを傷つける奴がいたら殺してやりたい。ユウが、ほんとに大好き。

大好き。大好き。」

私も、強く強くユウを抱き締めながら言った。

「ありがとう…。僕も、ハナが死ぬ程大事だよ。命よりも、何より

も」

少し震えた声で彼が言った。

これほど大切な友達がいる私は、何て幸せなんだろう。

これほど大切な友達が出来た私は、一生分の幸福を使い果たした

のかもしれない。

仮にそうだとしても、上等だ。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

これからの人生、どれだけ凄惨な事があつたとしても、ユウに代えられるものなんてない。

「もしかして、ハナが男だったら…或いは、僕がゲイじゃなかったら…二人の関係は違つてたのかな」

「どうなんだろうね。想像もつかない。…でも多分…友達になつた、と思う。…そう、思いたい」

もしかして、私達の友情はすごく悲しいものかもしれない。

似た者同士が傷を舐め合う、すごく非生産的な、無惨なものかもしれない。

でも私達は、幸せだ。

そして多分、それが全てなんだ。

私達は、決して交わらない代わりに、永遠に側に居続ける、グラフ上の平行線。

例えば、 $y \parallel 3$ と $y \parallel -3$ とかね。

2月に入り、私とユウはウリの回数を大分少なくした。

前はヘタしたら毎日のようにしてたのに。

アタマがオカシクなるように、なるように。

なるべくいっぱい売らなきゃ。

なるべくいっぱい自分を痛めつけなきゃ。

そんな、義務にすら似た思いで売り続けていた。

1日に何人も客をとったり。

でも、今は週に1〜2回売るくらいだ。

それは、アタマがオカシクなるように、と願つてではなく、ただの惰性で売つていただけだろう。

相変わらず私の人生には意味はなく、ユウの人生にも意味はない。

ママは相変わらず私を罵り、ユウは過去に苦しむ。

でも、私にユウがいる事、ユウに私がいる事。

それは、大きな大きな安らぎ。

もう、何も要りません。

私たちは屋上で出会い、屋上で語り合った。
私達は絶望を超えたところで、お互いの傷を舐め合った。
そこは薄汚い、雨晒しにされた、コンクリートの屋上だった。

第七話に続く。

もう、何も要りません。 7

第七話

3月に入ったものの、まだ冬の寒さの残る日。

私はまたユウの家に来ていた。

がらんとした室内にもだいぶ慣れた。

「ジャスミンティーと紅茶、どっちがいい？」

「ジャスミンティーちょうだい。私大好きなんだ」

ユウがいれてくれたジャスミンティーはあつたかくて美味しかった。カップの中で開いて行く茉莉花が不気味で、そして、綺麗だった。

私はクッションに座って、彼はベッドの上に座った。

ただ、お茶をすすする音が続く。

ユウは机の上のMacの電源を入れた。

「あれ、Mac、どうするの？」

「僕が作った曲が入ってるんだ。て言ってもアレンジなんだけど。ハナに聞いて欲しくて」

ユウが音楽再生ソフトを起動して、プレイボタンをクリックする。

Macのスピーカーから流れる、音。

その音は…

遠くで光に包まれながら流れてくるような、

魂をそつと撫でられているような、

限りなく完璧な青色にくるまれているような、

パッヘルベルのカノン。

ユウがアレンジしたカノン。

時間にしてわずか4分弱。

わずか、4分弱。

もう、何も要りません。

それなのに、
私は、
その美しさに、
心臓を

貫かれた。

再生が終わった。

部屋には静寂が戻った。私は動かない。

ただ息を吸い、吐く。

涙が出そうでも出ない。

広大な大地を見たような気がした。

多くの観客に囲まれたギロチンの処刑場を見た気もした。そう、

まるで、マリー・アントワネットの処刑のような。

私はゆっくり、ユウの方に顔を向ける。

「この曲を聴きながら、死のう」

自然に、ごく自然に、まるで当たり前のようにその言葉が出た。

「うん、死のう」

ユウも当たり前のように答えた。

「二人で死ぬ為に作ったんだ」

もう、アタマをオカシクする必要はない。

穏やかに、死ぬ事も出来るんだ。

私達は諦観の境地で、死ぬ事を決めた。

3月4日、日曜日の事だった。

二人が出会ってから、2ヶ月弱。

もう、何も要りません。

私達は、自殺の決行日を4月8日と決めた。ユウの妹さんの誕生
日らしい。

もう、何も要りません。

「ごめん、勝手に決めて。でも、どうしてもこの日にしたいんだ」
謝りながらユウが言う。綺麗な顔が悲しみに少し歪む。

「きつと、妹は泣き叫んだと思うんだ。『お兄ちゃん助けて』って、でも僕は起きなかつた。妹がどんなに叫んでも。絶叫しても。その最期の瞬間にも。：

…お父さんは、お母さんが男と家を出て、リストラされて、ほとんど喋らなくなった。でもあの前日、バラエティの番組を見て、少しだけ笑ったんだ。僕は嬉しかった。お父さんは立ち直りつつあるんだ、って思ってた。でも、違ってたんだ。まさか自殺と殺人を決めた、悲しい笑顔だなんて思いもよらなかつた。：3人で飲んだお茶。きつと僕のだけ、睡眠薬が入ってたんだろうね。僕だけ…。そして、妹は血塗れになって殺された」

ある日突然、『お前なんかいらなかつたんだ』と宣言されたユウ。
「うん、うん。じゃあ、その日にしようね。妹さんの為にも、ユウの為に」

そう言うと、ユウは少し嬉しそうに笑った。

「：ねえ、ユウ。今から1ヶ月、私、家を出てユウの家に住んでもいい？」

「もうね、嫌なんだ。存在価値を全否定されるのも、存在意義を全否定されるのも。死ぬのなら、せめて最後の1ヶ月くらいは、楽しい気分でいたい。大好きな大好きな友達と」

毎日毎日、少しずつ、『お前には生きる価値がない』と刷り込まれ続けた私。

「うん、いいよ。妹の部屋、そのままにしてあるから、使って」

「え、でも…いいの？妹さんの部屋でしょ？」
私は申し訳なく思ってた聞く。

「いいよ。ハナならいい。ハナなら、優子…妹も怒らないよ」

「ありがとう、ユウ」

そして、その日から私達は同居を決めた。
家に帰って、こっそり荷物を持ち出して、そのままユウの家に行
った。

さよならママ。

永遠に。

出来るなら愛して欲しかった。

だけど、それは無理だつて分かったから。

でも、覚えてて。私はママを愛してた。

忘れないでね。この事を。

そして今日から、ここが私の家。

死を待つ私達の、家。

似た者同士の私達の、最後の場所。

妹さんの部屋。

本棚には本が溢れかえり、入りきらなかった本は床に積みまわ
る。本は、小説だったり漫画だったり、様々。私の知らないものば
かり。パラパラと読んでみると、面白いものもあれば私には意味の
分からないものもある。

部屋の隅には、水の入ったオブジェが置いてあった。電源を入れ
ると、七色の泡がぼこぼこ水の中で泳ぐ。濃い黄色から薄いオレ
ンジに変わり、それが濃い赤になって薄いピンクに変わり、薄い薄
い、透明に近い青になって、濃い青になって。

その、限りなく透明に近い薄い青色に、何だか救いみたいなの、安
らぎを感じた。

ドレツサーにはチープコスメ。安くてもおめかししたいっていう、
ムスメ心。

きつと、頭が良くて、ユウに似て可愛い子だったんだろうな。

ごめんね、優子ちゃん。

もう、何も要りません。

今日からこの部屋をお借りします。1ヶ月。

リビングに出ると、ユウがお茶をいれていた。本格的な中国茶。殺風景なリビングの食卓テーブルについて、ユウの入れてくれたお茶を飲む。

「菊花茶って言うんだ。烏龍茶の一種」

「美味しい」

小さな茶器で飲むお茶はいい香りがした。

お茶と沢山の本と大切な友人。

ここは最後の場所にふさわしすぎる。

「…ねえ、ユウ」

「ん？」

「これから1ヶ月、学校行くのもやめて、思いつきり遊ばない？私、ウリで稼いだお金、あんまり使わないで貯金してたから、パーツと使っちゃおうよ。今まで出来なかった事とか、やりたかった事とか、バカみたいな事とか、いっぱいいっぱい」

「なんだかワクワクしていた。」

「いいね！僕は生活費に回してたからそんなに貯金ないけど、でも少しはあるし。全部使

っちゃおう」

そうか。ユウは、この家で一人で暮らしていたんだ。

妹が殺されて、お父さんが自殺した、この家で、一人で。

一人で住む3LDK。妹が殺されてお父さんが自殺した3LDK。

そこで一人で生活する苦しさや悲しさはどんなだろう。

悪夢で飛び起きた日。

苦しくて泣き明かした日。

気が狂いそうになって、狂いたいと切望した日。

ああ、そうして彼はクルージングに顔を出すようになったんだ。

そこに安らぎはなくても。

僅かな救い、『アタマがオカシクなる』事を求めて。

もう、何も要りません。

「ねえ、ユウ」
「ん？」

私が彼に出来る事。

出来るだけ彼を受け入れる事。

出来るだけ感情を分かち合う事。

それだけだった。

自分の無力さに嫌になる。

でも、似た者同士の私だからこそ、出来る事もあると信じて。

「いっぱいいっぱい楽しもうね」

「うん」

ユウは満面の笑顔で答えた。

ああ、そうだ。もう一つ。

出来るだけ、彼を愛する事。

次の日、私達はデパートに来ていた。目的は買い物。

とりあえず、欲しいものとか何でも買っちゃえ！みたいなノリで。

私は真つ先に、CとCのロゴで余りにも有名な、一流ブランドのSHOPに行った。

以前、路面店に飾ってあったのを見て、綺麗だなあ、と思っていたワンピースを買いおう

と思っただのだ。

フロアの雰囲気からして、他の階と違う。床に敷き詰められた絨毯。勇気を振り絞って、入り口に入る。

高級感に満ちた店内で明らかに私達は『異物』だった。

店員の目が笑っていない。さっさと出て行け、とでも言いたげだ。

「あの。このワンピース、試着させてもらえますか？」

「…かしこまりました」

うさんくさそうに試着室に案内された。

試着室も、私が今まで着ていた服のSHOPとは段違いに広い。

もう、何も要りません。

黒のニットのワンピース。肌触りが信じられないくらい心地よい。その肌触りにうっとりする。

試着室のミラーでワンピースを着た私をみる。

明らかに似合っていない。モロに服に着られてる。

でも、ごめんなさい、マドモアゼル・C。

このワンピースがどうしても欲しいんです。最後にこのブランドの服を着てみたいんです。どうか、許して下さい。本当は、もっと時がたって、本当にこのブランドが相応しい大人の女性になって着たかったけど、それは無理になっちゃったから。

試着室を出て、店員さんに言った。

「これ、戴きます。着て帰ります」

80万円ナリ。

ついでに靴も買って（だってそれまで履いて来た靴は余りにもワンピースに似合わないから）合計で84万3千円ナリ。さらにバッグも買って（だってそれまで持ってたカバンは余りにも全てに合わないから）、結局合計で103万3千円ナリ。

こんな大金を数十分で使うのは初めて。カバンから札束を出して支払いをする私を、店員は目を丸くしてみている。面白い。どういう人間だと思われてるんだろう。

それまで着ていた服や靴や鞆を紙袋に入れてもらってSHOPを出た。

多分、もう二度と来る事はないだろう。

そう思うと、悲しくなった。

さようなら、マドモアゼル。ありがとう。

ユウは、特に欲しいものはないけど、一度女装がしてみたいと言った。

「所謂ニューハーフの人達と僕たちゲイは違うんだけど。彼女達は性別と体を神様が間違えちゃった人達だから。でも、一度女装したいとは思ってたんだ」

もう、何も要りません。

「どついう服が着たいの？」

「思いつきりゴスの服がいいな。前に冷やかしてそんな店に入ったんだけどさ。そこに飾ってあった白いワンピース、あれが欲しい」

道に迷いながらやっと見つけたユウの言うSHOPは、入り口が鉄格子で地下へと続き、壁には鎖やビニールに包まれたマネキンが飾られている。

中には、全身真っ黒の goth な服を着た美人の店員が3人いた。彼女達は特に私達に話しかける様子もなく、服を整えたり、伝票の整理をしていた。

店の中は蛍光灯ではなく、白熱灯がいくつも天井からぶら下がり、それが店内をぼんやりとした光で映している。

ユウのお目当てのワンピースはすぐに見つかった。

胸の部分がコルセットのような編み上げになっている、真っ白なロングのワンピース。

「試着したいんですが」

ユウが美人店員に話しかけた。

彼女はちよつとだけ顔にびっくりした表情を浮かべて、ユウを試着室に案内した。

どんなだろう。

ユウはもとの顔が物凄く綺麗だから、きつと似合うだろうな。

いや、でも基本的に彼は男だから…。

私が色々と考えていると、試着室のカーテンが開いて、ユウが出て来た。

「…何か、変」

無然とした顔でユウが言う。

確かに、何か変だった。

ユウの髪が短すぎるからだろうか？彼の髪は少しウェーブがかかった薄い茶色で、耳の下辺りまでの長さ。

女装には、少し合わないかもしれない。

もう、何も要りません。

そこに、美人店員が黒い帽子とブーツを持って来た。帽子を被って、サイドの髪を少しだけ出して、ブーツを履くと。思わず私は口をぽかんと開けた。天使のような美少女。

「これ、全部下さい。着て帰ります」

合計13万4千円ナリ。

これでも十分すぎる程高価な買い物なのに、さっきの買い物か箱外れだっかたから、感覚が麻痺して、「安い！」と思ってしまうた。

SHOPを出る。

まだ、時間は夕方。

さあ、次はどこへ行こうか？

飛びきりの美少女（男だけど）と、全身超高級ブランドの女子高生。

奇妙なフタリ。

今なら何でも出来る気がする。

何でも来いって気がする。

「次、何か欲しいものとかある？」

「うーん……ない。ハナは？」

「……ないなあ」

「物欲ないね、僕たち」

軽く笑いながらユウが言う。私も軽く笑って答える。

「ね」

「とりあえず、ぶらぶらしよつか、折角こんなところまで来たんだし」

「そうだね、物凄い美少女を街中に見せびらかさなきゃ」

「あははは」

もう、何も要りません。

私達は、久しぶりに来た街をとにかくブラブラした。道端の雑貨屋を冷やかしたり、路面店に入ってみたり。

疲れたらカフェでお茶を飲んで。
そして夜になって、そこら辺にあったカフェバーで夕食を採る事にした。

店内は、四角だらけ。

キューブみたいな椅子やテーブルやオブジェ。

私はワタリガニとトマトのパスタとビール、ユウはペペロンチーノとカンパリソーダを注文した。

ワタリガニはバカみたいに食べにくくて往生したけど、美味しかった。

「これからどうしよつか？」

ちよつとだけビールを飲んでほろ酔いになったら、もっと飲みたくなった。

「折角だからクラブ行かない？この辺にね、Atomicってクラブがあるの」

そこは私が時々友達と行くクラブで、かかっている曲は大抵トランス。

酒（か、クスリ）でハイになって踊るのは楽しい。

「僕、クラブって初めてなんだ」

「そうなんだ？酒ガンガン飲んで踊り狂うの、超楽しいよ」

「じゃあ、ハナがカニ食べ終わったら行こっか」

Atomicの前では、数人の男が地べたに座って煙草を吸っている。微かにガンジャの匂いもした。

懐かしいな。

外からでも音楽がガンガン響いている。

私達はそこを素通りして、入り口に入る。2500円払って、ドリンクチケットを受け取る。

左手に再入場用のスタンプを押してもらって。手荷物はロッカーに入れて、フロアに行く。

もう、何も要りません。

鼓膜を劈くような爆音。

ああ、久しぶりだ。この感覚。

ユウは初めてのクラブが珍しいらしく、キョロキョロしている。爆音で声が届かないから、耳元で怒鳴るように喋る。

「とりあえず、バーस्प行ってお酒飲も！」

私はバーテンの兄ちゃんにドリンクチケットを渡して、

「ズブロッカ！ロツクで」

と叫んだ。

「いきなりすごい頼むな」

ユウが笑いながら言う。

「酔ったもん勝ちよ！」

「じゃあ、僕もズブロッカ！ロツク！」

兄ちゃんはズブロッカを2杯作り、無造作に置いた。

それを受け取って、テーブルのあるブースに移動。

「取りあえず乾杯！」

使い捨てコップを合わせて、私は一気にズブロッカを飲み干した。

それを見て、ユウも一気に飲み干した。

二人顔見合わせてニッコリ。

そこに頭の悪そうな男が二人、話しかけて来た。

「ねーねー、二人で来たの？」

「一緒に踊ろうよー」

いつもは適当に乗って流すナンパだけど。

ユウに目配せすると、分かってくれたらしく、彼はこう言った。

「僕、男だよ」

ユウの声を聞くと、男達は逃げて行った。

「あははは！根性ねーよ！僕の好みじゃなかったからいーけど」

「あはははは！」

一気飲みしたズブロッカはすぐにまわる。

それでも私達はもう1杯ずつズブロッカを飲んで、フロアへ踊りに行った。

もう、何も要りません。

ガンガンと響くトランス。

今かかっているの、どっかで聞いた事あるな。CD持ってたっけ。

ああ、それにしてもトランスは最高に気持ちいい。

ましてや酔っている時は。

フロアではみんな思い思いに踊っている。

私達も適当に踊る事にした。

トランスと酔いがうまい具合にアタマの中で混ざり合う。

グルグル回るフロアブース。

ユラユラ揺れるサイケデリック。

時々ユウと目を合わせて笑う。

時々バースペでまたズブロッカを一気。

Atomicにはお立ち台みたいなのがあって、その上にあがって踊ったりもした。

ズブロッカの強烈な酔いで、異様に楽しく、異常に高揚して、私達は踊り続けた。真冬なのに少し汗ばんだりもしながら、とにかく踊った。

盛り上がって服を脱いで、ブラー丁になってる女の人にオッサンみたいな歓声をあげたり。

何度もズブロッカを頼んでバースペの兄ちゃんと仲良くなったり。ナンパに来る男達をあしらったり。

私達は、発狂したように楽しんだ。

猛烈な眠気と疲れが襲って来て、帰る事にしたのは明け方4時。

外に出るとまだ真っ暗で、冷気が火照った頬に心地よかった。

まだ二人とも完全に酔っぱらっていたので、二人とも異常にハイで、滅茶苦茶な事を叫びながらタクを拾って帰った。

タクの中でもぎゃあぎゃあ騒いで笑う私達を運転手は素無視。慣れているんだろう。

家に帰って、ユウはフラフラしながら「おやすみ」と部屋に入った。その直後、ばたーんと倒れる音がした。きつと床に倒れて寝

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

てるんだらう。

私はフラフラしながら、それでもシャワーを浴びてから、ベッドに崩れ落ちた。

今日1日の我々の狂いっぷりを思い返しながら。

第八話へ続く。

もう、何も要りません。 8

第八話

翌日は、ひどい二日酔い。

ベッドから起き上がれない。気持ち悪い……。吐きたい……。
ヘパリーゼ飲みたい。ソルマックでもいい。おえ。

それでもなんとかリビングに這い出すと、シャワーの音が聞こえた。ユウは私より早く起きたらしい。

シャワー浴びる元気があるなんてすごいな。

あ、でも彼は昨日お風呂入ってないから気持ち悪いか。

慣れないキッチンで、ハーブティを入れる。たまには私がしなくちゃ。

ちょうどいい感じにお茶が入ったところにユウが濡れ髪に寝間着で出て来た。

ゲイだ、って分かってもちよつとドキツとする。

「おはよー。私超二日酔いだよー。死ぬ。ユウは元気だねえ」

「いや、僕も朝気持ち悪くて吐いたよ。あ、いい匂い」

「落ち着くかなーと思ってさ」

「ありがとう」

二人でレモンジンジャーのお茶を飲む。美味しい。

ちよつとだけ、胃が落ち着いたような気がする。生姜が体を温めてくれる。

「昨日はすごい楽しかったねえ」

ユウが改めて言う。

「ほんと、初心者とは思えないはじけっぷりだったよ。また行きたいね」

「うん、また行こう。後さ、家って完全防音なんだ。だから家で音

もう、何も要りません。

楽ガンガンかけて二人で楽しむのもいいね」

「あ、それいいね。お酒安くすむし」

お茶のおかげでだいぶ胃が落ち着いた。

ユウが冷蔵庫からヨーグルトを出して来てくれた。

「あんまり食欲ないでしょ？」

「うん、ありがと」

ヨーグルトを食べながら思う。

今日は何をしようかな。

最後の日まで、後4週間と4日。

たくさんたくさん、楽しまなきゃ。

最後の1ヶ月、猛スピードで駆け抜けるように生き急ぐ。

そして最後は、緩やかに穏やかに死ぬ。

とりあえず、今日は何をしよう？

いくら使ってもいいし、何をしてもいい。

いざそうになると、なかなか思いつかない。

今日はとりあえず二日酔いだし、無理は出来ないな。

ヨーグルトを食べ終わったら、ユウが薬を出して、それを飲んだ。

「それ、何のお薬？」

「精神科の薬。…事件以来PTSDとかいうやつになって。なんかトラウマになるような体験をした人になる病気らしいんだ。いろいろな薬飲んでて薬漬けみたいな状態だけど…薬飲んでないと、まともな生活が出来ないから」

そうか。前に精神科を紹介されたって言ってた。

彼の手のひらには、7錠もの錠剤。

私達は似た者同士だけど、彼の辛さは私のは比べ物にならないだろう。

私はアル中のママが怖くて、ママに嫌われて罵られて、存在意義を否定されて、いらぬ子供で、毎日泣いて、憂鬱で憂鬱で、時間が過ぎるのをただ待っただけの絶望の日々で。

でも彼はたった一人の生き残りで、目の前で死体を見て、それは

もう、何も要りません。

愛する家族で、突然存在を否定されて。それまでは普通だったのに。母に罵られる度に、私は誰かに話を聞いてもらいたいと願った。誰か、私の話を理解してくれる人にただ聞いてもらいたいと願っていた。

彼が同じかは分からないけど。

「ねえ、ユウ」

「ん？」

「事件の事、話してもらえる？良かったら、だけど」

「いいよ」

ユウは普通に答えた。

彼は無表情で、そこからは感情を読み取れなかった。

「…あの朝、起きて、普通にドアを開けたんだ。あくびなんかしてたかもしれない。まず目に飛び込んだのは、血塗れのリビング。何が起こったのかわからなかった。このソファに優子が横たわってた。目は見開いたまま。僕はますます何が起こったのかわからなかった。とりあえず、優子に呼びかけたんだ。『優子？』って。無論、返事なんかない。でも呼び続けた。『優子？優子！？』って。完璧に死んでる、って理解するまで、呆然と立ち尽くしてた。優子の目が悲しそうに見えた。でも僕は悲しい、とか感じる事も出来なくて、ただ呆然としてた。ただただ、ずっとずっと、立ったままで。何時間、何分、そうしてたかわからない。

とりあえず、お父さんと呼ばなきゃ、そう思ってお父さんの部屋に行っただ。空っぽだった。お父さんはどこに行っただのか？分からない。強盗でも入って誘拐された？でもそれなら女の優子を拉致するはず。何が何だかわからなかった。とにかく僕は混乱しきっていた。それから、僕はいつもの癖で洗面所に行っただ、洗顔をしようにとした。混乱しすぎて訳が分からなくなっただのかもしれない。もししたら、お風呂のドアに影が見えたんだ。開けてみたら…入り口のノブに縄を括りつけて、座るようにして首を吊ったお父さんがいた。目が飛び出して、舌が飛び出して…僕は叫んだ。『ギヤアアアア

もう、何も要りません。

アアアア！』って。だってそれはお父さんじゃないみたいな、死体そのものだったから。僕は何度も何度も、叫んだ。叫び尽くして、喉が痛む頃、やっと少し冷静になれた。

僕はリビングに戻って、優子に会いに行った。今となっては分かる。優子は、お父さんに殺された。お父さん、昨日は笑ってたのに。優子、痛かっただろうね。僕に助けを求めただろう。僕は何で目を覚まさなかったんだろう。自分が憎かった。睡眠薬の事を思ったのはしばらくたってから。しばらくの間は、自分の情けなさにとうしようもなく腹が立って腹が立って。優子。助けてあげられなかった。お父さん。僕をいらないと判断した。僕は…何の為の存在？今、何で生きてる？そんな事ばかりグルグル頭を巡って…。

警察に連絡しなきゃ、と思ったのはもう日が落ちてた頃だった。警察に電話した時の僕の台詞はすごい間抜けだったと思う。『あの、死んでるんです。お父さんと妹』

警察はすぐに来てくれた。いろいろ現場検証とかして、僕にも色々聞いて来たけど、僕はぼんやりしてほとんど役立たずだった。供述調書、ってやつも取ったけど…何を喋ったか、それも覚えてない。後はずっと床に座り込んで、ただ警察の人のする事を見てた。

『心中ですね』『ああ、そうだな』そんな言葉が聞こえた。心中。僕は、連れて行ってもらえなかった。僕は、必要じゃなかった。

警察の中で、一番偉い人らしき人が、僕に『汚いとこだけど、今夜一晩私の家に泊まりなさい』って言うてくれた。僕はただ頷いた。意思も何もなかった。何も考えられなかった。偉い人の家でも、僕はただ座って動かなかった。何も食べなかった。何も飲まなかった。時々トイレに行くくらいだった。何も聞こえなかった。何も言わなかった。

2日後、司法解剖が終わり、正式に『親子心中、父親は縊死、娘は腹部から背中にかけての刺し傷が致命傷』と結果が出た。

警察の人が親戚や学校に連絡してくれたみたいで、親戚の人達が

もう、何も要りません。

た。それで精神科受診を勧められたんだ。僕は今、余りにも凄惨な状況に出会ったせいで、少し混乱してるからって。精神科でも、僕はまだぼんやりしてて、ほとんどうまく喋れなかった。けど、PTSDって診断されて、薬を貰った。薬を飲んだら、だいぶ落ち着いたのを覚えてる。医学ってすごいね。でも、僕の心は相変わらず空っぽだった。それでも優子の後を追う勇氣はまだなくて。

だから、僕はアタマをオカシクしようと思ったんだ。死ぬ為に自殺する為に」

ユウは静かに話を終えた。

沈黙が流れる。

彼の苦しみの象徴のような、重い重い沈黙。

改めて聞いてみると、私の絶望などちっぽけに感じる程、彼の絶望は大きい。

余りにも、大きすぎる。

彼に、私は、何も出来ないのだろうか。

私なら。

私なら、何をされたら嬉しいだろう。

ママ。

ずっとずっと、私はママに抱き締めてもらいたかった。『いいこいいこ』と撫でて欲しかった。

そして、『大好きだよ』って言って欲しかった。

抱き締めて、私を大好きだって言って。お願い。

私は、ユウを抱き締めた。

胸に顔を埋めるような体勢で、母親が子供を抱くように。

「よく頑張ったね、偉かったね。もう、何も頑張る事はないんだよ。もう、何も頑張らなくていいんだよ。ユウ、大好きだよ。大好き。本当に、大好きだよ」

そう言いながら、彼の頭や背中を撫で続けた。前に、彼が私にしてくれたように。

もう、何も要りません。

「もう、何も心配ないからね。もう何も、ユウを傷つけるものはないからね。私がユウを守るからね。私の命をかけてでも守るから。だから大丈夫。大丈夫だよ。世界で一番、ユウが好き。大好き」

自分が言っただけで済んだ事。

渴望していた言葉。

抱擁。

これで、ユウが少しでも楽になるかどうかは分からないけど。

私には、こうするしか思いつかなかった。

だから、ただひたすら、彼を抱き締め続けた。

彼は少しでも安らいでくれるだろうか。

どうかどうか、彼の苦痛が少しでも楽になるように。

そう祈り続けて。

温かく、卵を抱く親鳥のように、彼を抱き締めた。

「大丈夫。大丈夫。大丈夫だよ」

何が大丈夫なのか自分でも分からなかったけど、私は大丈夫と繰り返して、彼の頭や背中を撫で続けた。

しばらくそうした後、ユウは自然と私から離れて、言った。

「ありがとう」

「ずっと、誰かに聞いてもらいたかったんだ」

少しだけ赤い目をしながら。

「僕はずっとずっと、誰かに全部聞いてもらいたかった。でも重すぎて。余りに重すぎて、誰にも言えなかった。それに、聞いてくれるなら誰でもいい訳じゃないし。僕を分かってくれる人に、聞いて欲しかったんだ。ハナに出会えて、本当に良かった。ハナに出会えた事、それは神様がくれた僕の最後の幸せかもしれない。ハナのおかげで、僕は、人はどんなに苦しくても、どんなに辛くても、どうしようもない事があるんだって、理解する事が出来た。ありがとう。僕もハナが好きだよ。世界で一番、誰よりも好きだよ」

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

私なんか。私なんか何の役にも立ってないよ。ユウ。でも、嬉しかった。

少しでも、彼を癒せた事に。

そして二人顔を見合わせて、少しだけ笑い合った。

照れくさかったのかもしれない。

その日は、二日酔いもあって、家でのんびり、本を読んだりして過ごした。

穏やかな1日。

晩ご飯は、私の作ったシチュー。ユウは美味しいと言ってくれた。

第九話に続く。

もう、何も要りません。 9

第九話

翌日。

二人で朝ご飯を食べていたら、電話のベルが鳴り響いた。

「はい、松本です」

ユウが出ると、相手はユウの担任の先生のようにだった。声がバカでかくて、耳を澄まさなくても会話がまる聞こえだった。

「松本、お前2日とも無断欠席してるけど、どうしたんだ？大丈夫か？」

「あ、はい。大丈夫です。あの、1ヶ月程休みます。親戚と事件の事で……」

「そうか…分かった。ところで、お前、サクライハナって子、知らないか？」

私の名前だ。

「サクライハナ？知らないですけど…誰ですか？」

「いや、知らないならいい。お前と同じく2日無断欠席なんだが、その2日前から家出したみたいなんだ。お母さんが怒鳴り込んで来てな。心当たりはないのかって。たまたまお前と同じ時期だから、もしかしてと思ったが、知る訳ないよな。すまん。親戚と話がすんだら学校に来いよな。もうじき春休みだから進級は大丈夫だ。心配するな。じゃあ、体に気をつけるよ。」

いい先生だ。

それにしても、お母さん、学校に乗り込んだのか。携帯を着信拒否にしているから、他に手がかりがないんだろうな。

「ハナのお母さん、心配してるんじゃない？大丈夫？」

電話を切ったユウが聞く。

「大丈夫。愚痴をぶつける相手がいなくて不便してるだけだから。」

もう、何も要りません。

気にしない。それより、ユウって松本って苗字だったんだね」

私は話題を変えた。

もう、ママの事は考えないって決めたんだ。

最後なんだから。ママの事で煩わされる事はない。

思い出さない。

もうママとはさよならしたんだから。

「ハナもサクライハナって言うんだね」

「そう、サクライは難しい櫻に井戸の井。ハナは中華の華」

「僕たち、こんなに親しいのに苗字も知らなかったんだね」

「ね。ユウってどういう漢字？」

「悠久の悠」

「かつこいいねー」

「でも、名前なんか単なる記号に過ぎないよ。現に、苗字とか知らなくても僕達はこんなにも仲がいいんだし」

「ほんとに、そうだね」

その日の夜、私達は この辺りで有名なホストクラブ、「Pia tinnum」に行った。一度ホスクラって行ってみたかったから。

ユウは例のワンピースを着て、私はまたも全身をあのブランドで固めて行った。

これで大金持ちに見えるかな。

入り口で出迎えてくれた黒服は私達の顔を見て、露骨に怪訝そうな表情になった。高校生を店に入れたら大問題だからだろう。年齢確認でもされたら店には入れてもらえない。

咄嗟に私は、あの一流ブランドのロゴの入ったバッグを見せつけるようにして、言った。

「プロフィールファイル、見せて下さらない？それと、この店にはドンペリのゴールド、置いてありますかしら？」

自分でも吹き出しそうな程嘘くさい、カネモチコトバ。

ユウはさりげなく向こうを向いているけど、きつと笑いを堪えて

もう、何も要りません。

いるんだろっ。

黒服は驚きの表情と、その次に『上客だ』という笑顔を見せ、プロファイルファイルを見せてくれた。

私はNo.1のシュンリを。ユウはいかにもホストって感じのレイジを選んだ。

「いらっしやいませ」

まずレイジが来て、跪いて挨拶をした。

黒服が私の側に来て、申し訳なさそうに言った。

「申し訳ありません。シュンリはただいま接客中でした。もうしばらくお待ちください」

「すぐにシュンリを呼んで。ボトルはドンペリゴールドで」

即座にそう答えると、黒服は

「か、かしこまりました！」

と慌てて走って行った。

「いらっしやいませ」

それから僅か数十秒。

ほんとにすぐにシュンリが来た。ドンペリゴールドの威力だな。

黒服がボトルを持って来て、ドンペリゴールドの中、栓が開けられた。

私達4人はそれで乾杯。

まずっ。

やっぱりコドモにはシャンパンの味なんか分からないや。

「レイジ君、僕の好みかも。ねえ、男同士って抵抗ある？」

ユウが冗談とも本気ともつかない調子でレイジに迫っている。

それまで完璧に女だと信じていたのか、レイジはびっくりして対応に戸惑っている。

私の隣にいるシュンリは、さすがNo.1だけあって会話がうまい。うまくオナナゴコロをつかむ。顔は、まあオトコマエかなって感じ。

シャンパンはまずいけど、アルコール度が高いから酔うのも早い。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

「次、クリュツグ！」

ユウが黒服に言う。

「クリュツグの銘柄は如何いたしましょう？」

「一番高いやつでいいよ」

「クリュツグなんてよく知ってるねえ」

感心して私が言うと、ユウは笑いながら答えた。

「これとドンペリしか知らないんだ」

「あはは！じゃあその次はピンドンいこっか」

「ハナちゃんとユウ君って面白いね、付き合ってるの？」

シュンリが検討はずれの事を言う。

「付き合ってねーよ！」

二人ともハモって大笑い。

「僕ゲイだから。シュンリ君はゲイ、どう？」

今度はシュンリに迫るユウ。しかしさすがそこはNO・1。

「美しいと思うよ。特にユウ君みたいな綺麗な子だと」

うまくかわすなあ。

シュンリは私の肩を抱きながら、甘い言葉を囁く。

シュンリの接客はうまい。

ホストクラブにハマる人の気持ちがちよつとだけ分かった。

「次、ドンペリロゼ！ピンドン！」

私達は余り飲まないけど、レイジとシュンリ、それにシュンリが席を外したときのヘル

ブホストがガンガン飲むから、私達は次々とシャンパンを注文した。

他の客も、『なに、あの子達？』みたいな目で見てる。面白いな。

「ねえねえ、彼女っているの？いるでしょ、本命ってヤツ」

「いないよ。でも…ハナちゃんみたいなのが好みだな」

「あはは。常套句だよな」

「本気だよ」

真顔で言うシュンリ。こういうのがウリか。

もう、何も要りません。

その隣では、まだユウがレイジを口説いてる。

「ね、この近くにさ、ゲイバーあるんだけど、アフター行こうよ」

「あ、あの…終業が朝9時までなんですよ…」

「あー大丈夫。待つし」

レイジは泣きそうになっていた。

私達は散々ホストをからかって、店を後にした。

お会計は軽く100万を超えたけど。

シュンリとレイジが、店の外まで見送ってくれた。最後にシュンリが私を抱き寄せてキスしてきた。この野郎、と思ったけど、私は『ホストクラブに来てる客』だったんだった。

じゃあ、しょうがないな。最後まで、そう振る舞わないと。

「あー面白かった！」

「ね！超面白かった！」

ユウと二人で家に帰る道すがら、話した。

「ねえ、マジでレイジってユウのタイプ？」

「うーん、実は微妙。反応が面白くて、つい」

笑いながら正直に答えるユウ。

「シュンリはちよいきモいくらい接客上手だったよ。携帯聞かれたけど嘘教えちゃった。超上客捕まえたと思ったたろうけど、気の毒」

「僕も、嘘教えた」

二人で笑う。

「それにしても今日の売り上げ、すごいだろっなあ。シュンリとレイジ、褒められまくりだね」

「もう二度と来ない客だけだね」

「あははは」

また別の日には、私達は高級フランス料理店に行った。マナーも何もよく知らなかったけど、美味しかった。一流のサービスをしてくれる店でふざけるような事は出来ず、一流の味とサービスを堪能した。シェフに敬意を払って、フランス料理って案外美味しいかもしれない。でももう二度と来る事もないだろうな。そう思うと、寂しい。

またある日は、お酒をどっさり買い込んで、家でフランスパーティをした。

二人だけのパーティ。かけるCDは私の大好きなCD。主にトランスと、サイケ、テクノ。それに、ユウのアレンジしたカノン。

大音量でかけて、間接証明の中、リビングで踊り狂う。これでミラーボールとかターンテーブルがあったらカンペキ。買い込んだお酒を飲みまくり、踊って踊って、狂ったように踊った。

踊り疲れた後は、二人ともソファで倒れ込むように寝た。

またある日は、二人で買い物に出かけた。何だかデートみたいで照れくさかったけど。

アジアな雑貨屋さんでお香を見たり、オソロイでペンダントを買ったり。

夜、有名なデートスポットの港に行つて、海を見た。周りはカッブルだらけで、部外者の目からその様子を見るとかなり笑えた。

だって、肩を抱き合ったり手を繋いだりして海を見ている2人連れが、延々と港に連なってるんだもん。

もう、何も要りません。

ユウがゲイバーに連れていってくれた事もあった。ゲイバーのママは、びっくりするくらい男前で、これでゲイなんでもつたない、と思っってしまった。ユウは常連で人気者なのか、女連れでもみんな優しくしてくれた。そこであるネコの人が見せてくれたペニスピアスは一生忘れられない。あれで本来の機能を果たすのだろうか？全く余計なお世話だけど。

多分世界一有名な、高級ホテルのエクストラスイートに泊まった事もあった（王様気分！）。

プールと滑り台のあるラブホに泊まった事もあった（無論、何もなかった）。

ハンバーガーを100個買って、それを店の前で歩く人に配った事もあった（滅茶苦茶怒られた）。

また別のクラブに行って、踊りながらサルビアを吸った事もあった（サイケデリック！）。

私達は、毎日毎日遊び続けた。ただただ、無邪気に、夢中で遊び続けた。

それが他人からは狂ってるように見えたとしても。私達は、幸せだった。

最期の瞬間は徐々に近づいて来ている。それを待ちながら。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

第十話に続く。

もう、何も要りません。 10

第十話

自殺決行日の2日前、ユウは遊園地に行こうと言い出した。

「昔、父さんと母さんと優子と、4人で行った場所なんだ」

ユウの幸せな頃の思い出の場所。

そこに行く事は辛くないのだろうか。

心配だったけれど、ユウは普通に楽しそうに笑っていて、だから私も段々楽しみでわくわくしてきた。

この年で遊園地に行くなんて逆に新鮮。

朝早くから開園前に並んで、一番乗りをゲット。

その遊園地はここでは一番大きいところで、平日だから人は少なかった。おかげで待ち時間無しでほとんどの乗り物に乗る事が出来た。

ジェットコースターに乗っては絶叫してる写真を撮られたり。

フリーフォールで恐怖で死にそうに叫んだり。

メリーゴーラウンドで異様にはしゃいで周りの親子をびびらせた。

疲れてクソまずいアメリカンドッグを食べて、ソフトクリームを食べて。

二人とも、何かある度にそれがどんなくだらない事でも大笑いした。

周囲の人が奇異な目で見る程。

お化け屋敷に入る。最近のお化け屋敷はよく出来てる。本気の恐怖を感じながら、頭はどこか冷静で、必要以上の声で絶叫する。まるで絶叫自体が目的のように。

また別のジェットコースターに乗る。絶叫する。

バーチャルリアリティの館に入ってゾンビを撃ち殺す。叫びなが

もう、何も要りません。

ら、笑いながら。

水の中を走るコースターに乗って、飛沫をかぶっては叫び、笑う。びしょぬれになって、また笑う。

子供が乗るような、ちゃちい電車に乗る。笑いながら。

ひとしきり乗り物に乗った後、ふらふらとベンチへ歩いて行く。

はあはあ息をついて、ベンチに座る。

二人とも同時に目を見合わせる。

するとどちらからともなく、大笑いした。

出せる限りの大声で、激しく、狂ったように。

一生分の笑いをここで出し切るように。

笑った。笑った。笑った。

とにかく、笑い続けた。

息が吸えなくて苦しくて、それでも必死で笑い続けて、喉が哽れて、むせて。

息を吸おうとして、ぜいぜいと激しくなった呼吸に集中して、やっと私達は笑いやんだ。

二人とも涙ぐんでいた。笑いすぎたせいか、それとも。

日が傾き始め、遊園地は切ない雰囲気にも包まれている。

帰り支度をする親子連れ。

これからホテルにでも行くのだろうカップル。

私達は雑踏を見ながら、無言でしばらく過ごした。

「そろそろ、帰ろうか」

ユウが言う。私も周りの切なさに感化されて、去りがたく切なく思った。

二度と来る事のない遊園地。

ああ、そう言えば、二度と来る事のないところばかり行ったなあ。

その中でも、周囲が賑やかで幸せそうである分、一番切ない場所はどこだった。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

私は、寂しくて子供のように泣いた。
しくしくと、泣きじゃくった。

ユウはそんな私の手を握ってくれた。

ユウを見上げると、私は彼の口元が震えているのに気付いた。

ああ、ここはユウにとつての思い出の場所だった。

お父さんとお母さんと、優子ちゃんと、ユウ。

幸せな思い出。

あの頃の彼も、この切ない風景を見たのだろう。

幼い彼は、寂しくて今の私のように泣いたのだろうか。

その時、一筋、彼の目から涙が頬を伝った。

そしてそれは二筋、三筋に増えて。

彼はまっすぐ前を見たまま、ただ涙だけ、頬に伝わせた。

私は。

こんな綺麗な泣き顔を初めて見た。

その雰囲気に気圧されて、私達はお互い泣きながらも、何も言わずに家へと帰った。

ただ握り合った手に力を込めて。

家に帰り、私達はお互い、ソファに沈み込んだ。

「疲れたね」

「ほんと、超疲れた」

私達は多分、あの遊園地で一番はしゃいでいただろう。

そして多分、一番悲しんでいただろう。

最後の遊園地。

楽しそうな親子連れ。笑い声。幸せの光景。

それは私にも、ユウにも辛い風景だった。

私は寂しくて泣きじゃくり、ユウは無言で泣いた。

それでも、私達は今日、遊園地に行かなければいけなかったんだ。

その理由に私はやっと今、気付いた。

楽しそうに笑う子供。幸せそうな家族。
普通の、当たり前前の、幸せな家族。
それを目に焼き付ける。

その幸せは私達には永遠に手に入らない。
その事を心底理解する為に。

それでも、私達には握り合う手がある事。
それを心に刻み付ける為に。

強く、強く。

「ごはん、どうしよう？あんまりオナカ空いてないんだよね」

「中でいっぱい食べたからじゃん、ハナ」

ユウが笑って言う。

「あ、そっか。そうだったね」

あたしも笑う。

まだ遊園地の寂しさや悲しさを二人とも引きずっていて、何となく空元気。

でも、私達の握り合う手。

それはパズルのようにぴったりとつながる。

それはなんて奇蹟的な幸せ。

「今日は早めに寝よ。お風呂に入浴剤入れて、ゆっくり疲れをとって。今日の悲しみも幸せも、ゼーんぶ、お湯に溶かして、浴びよう。体中に」

空元気の笑顔で、少し笑いながらあたしはそう言った。

「それがいいな、明日もあるし。ハナが持って来てくれた入浴剤もまだいっぱいあるし。…今日は死ぬ程、本当に死ぬ程楽しくて、でも悲しくて、幸せだった。と思う。僕は」

「うん、私も。私も、そうだったよ」

バラの香りの入浴剤はとてもいい香り。

私は優子ちゃんの部屋で、明日の事を考えながら、ベッドに潜り

もう、何も要りません。

込んだ。

自殺決行日の前日となる明日。

何をしようか。

何をするのがいいんだろう。

そんな事を考えながら、私はいつの間にか眠っていた。

優子ちゃんのベッドはいつもいい香りがする。

翌日。いよいよ、明日は自殺決行日。最期の日。

その前日となる今日。

何をして過ごそう？何をするのがふさわしい？

「おはよ」

「おはよ。なんか面白いニュースある？」

「うーん。何もなし。4コマが超つまらん。僕が描いた方が絶対

面白い」

「あはは」

明日で全て終わる。

この1ヶ月、死ぬ程楽しかった。

この日々が終わるのが悲しい。ただ、悲しい。

その為、ほんの少し未練みたいなものも感じる。

でもこんな生活を続けられる訳がない。

この1ヶ月が終わったら、また地獄が始まる。

そして、その地獄から私達は永遠に逃げるんだ。

明日で、ほんとに全てが終わる。

全てが終わる。

なんて不思議な感覚。

言いようのない、不思議な感覚。

歯医者に連れて行かれるのを待つ子供のような。

遠足の前日の子供のような。

「ねえ、ユウ。今日は何をして過ごそう？」

もう、何も要りません。

ユウに問いかける。昨日から考えていたけど、思いつかない。

最期の日の前日。

「普通に過ごそう」

ユウは言った。

「何か特別な事をやる訳でもなく、普通の1日を過ごそう。食事を
して、散歩をして、夜はTVを見てお喋りしたりする、普通の1日
を」

そうだ。

きつと、多分、それが一番ふさわしい過ごし方。

穏やかな、穏やかな自殺の為の、最もふさわしい過ごし方。

「うん、そうだね。そうしよう。本とかも読んだりね。まだ読み終
えてないのがあるし。とりあえず、朝ご飯食べよう」

朝ご飯は私の作ったベーコンエッグとトースト。

食事の後、各自の部屋に入って、各々の時間を過ごす。

私は本を読んだ。優子ちゃんの本。後少して読み終わる。なか
か面白い。

疲れたらキッチンで紅茶をいれて飲む。窓からの太陽の日差しが
眩しい。

お昼ご飯は残ったパンで作ったサンドイッチ。これも私が作った。
晩ご飯はユウに腕を奮ってもらわなくちゃ。

お昼ご飯の後、少しお喋りして、眠くなったのでお昼寝。

目が覚めたら3時半。

ユウを誘って散歩に出る。

この辺りは大きな川があって、その河川敷を歩く。

桜の木がたくさんある。まだ満開ではないけど、もうすぐ満開で
この辺りはとても美しくなるだろう。それを見れないのが少しだけ
残念だった。

河川敷では野球をする子供や、お散歩の老夫婦や、手をつないで
歩くカップルや、様々な人達が様々な過ごし方をしている。

ああ、美しいな。

もう、何も要りません。

人々の生活って美しいな。
最後にそれを感じられて良かった。
美しい生活を送れない自分が少しだけ哀れだったけど。

晩ご飯は予定通り、ユウに腕を奮ってもらった。

ハンバーグとマッシュポテト、カボチャのスープ。

「ユウって料理上手だよねー」

「美味しい？」

「超美味しい！」

楽しく食事をして、二人でTVを見た。あまり面白い番組はやってなくて、二人でお話をして過ごした。

9時になったらお風呂に入って、11時に二人とも各自の部屋に入って、寝る事にした。

本当に、取り立てて特別な事など何も無い、普通の1日。

それが、もうじき終わる。

明日は、特別な1日。

このベッドで眠るのも、今日で最後。

優子ちゃん。ありがとう。

第十一話に続く。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。 11

第十一話

1ヶ月ぶりの学校は、新入生も入って様子がちょっとだけ違っていた。

でも、1ヶ月ぶりの屋上は、そのまま。

私達の楽園は、そのまま。

相変わらず、雨ざらしで薄汚い。

私とユウは屋上の床に寝転がる。

空がとても綺麗。

心はとても穏やか。

これから死ぬなんて嘘みたい。

私達の前から世界が消えるなんて嘘みたい。

ユウと他愛のない話をたくさんした。

あのTVはどうか、あの音楽はどうか、あの本はどうか。

とてもこれから消える二人とは思えない。

でも、確実にそれは近づいてきていて。

だから、私はあのカノンを聴きたくなった。

「ユウ、ウォークマン貸して」

「いいよ」

ウォークマンを手渡され、音量を最大に設定して、プレイボタンを押す。

「ユウも聴く？」

多分、『うん』と答えたんだろう。彼が頷いたので、イヤホンを片方差し出した。

流れるカノン。

空が綺麗。

風が少し吹いている。

もう、何も要りません。

私は最後の幸福を目一杯吸い込む。
春の暖かさと、風の冷たさの入り交じった空気。
その中で聴くカノンは切なくて、今までで一番、綺麗だった。

4分弱の再生が終わった。

二人とも、イヤホンを耳から外す。

そして、その時は来た。

「そろそろ、行こうか」

まるで家に帰るみたいに自然に、ユウが言った。

「うん」

私も自然にそう応えた。

屋上の鉄柵を乗り越え、僅かな立場に立つ。

「ねえ」

「ん？」

「そう言えばさ、ユウって何年何組だったの？」

「今は進級したから分かんないけど、1年6組だよ」

「マジで！後輩だったんだ。私は2年7組」

「先輩だったんだ」

「そうそう。今年は受験生だね」

風が少し吹いて、私のジグザグに切った前髪をなびかせる。

気持ちいい。

「ねえ」

「ん？」

「もしも、生き残ったらどうする？」

「うーん…」

しばらく考えるユウ。そして、少し笑いながら言った。

「二人とも生き残ったら結婚しようか」

「ゲイなのにな？」

私も少し笑いながら問い返す。

「愛情で結ばれる結婚じゃなくて、友情で結ばれる結婚に挑戦して

もう、何も要りません。

みよう」

「それが実現したら、世界で初めてかもね。偽装結婚を除いて」
少し考えて、また私はユウに問いかけた。

「じゃあ、どちらかだけが生き残ったら？」

「その時は…砂を噛みしめながら生きられるものか、試してみようか」

「結構辛い罰ゲームだね」

「あはは」

私達は、最後の話をしながらも、まるで普通だった。
全く、いつも通り。

何の緊張も、恐怖も、なかった。

あるのは、安らぎだけ。

穏やかさだけ。

ふと、ある本に書いてあった事を思い出してユウに言ってみた。

「ねえ、飛び降りの時間って長く感じるって言うよね。どうなんだろう」

「この高さだったら、実際落ちてる時間は2秒くらいのはずだけど」

「でも異常に長く感じるらしいよ」

「会話とか出来るのかな」

「出来たらいいね。それで、ゆっくりゆっくり、最後の景色を目に焼き付けるの」

出来るなら、最期の瞬間をなるべく長く味わいたい。

叶う事なら、顔が地面に叩き付けられるその瞬間まで。

「今日がいい天気で良かった」

空を仰ぎながらユウが言う。

「ハナがいてくれて良かった」

「ユウがいてくれて良かった」

私も空を仰ぎながら言う。

「聴きながら行く？」

ユウがウォークマンを指して言った。

もう、何も要りません。

もう、何も要りません。

「うっん、二人で、手をつないで行こう」
「そうだね」

手を握り合う。温かい。

最後に感じるのは、ユウの温かさ。

これに勝る幸せがあるだろうか？

「じゃあ、行こうか」

「うん」

私達は、握る手に力をこめる。

強く、強く。

そして、二人でかけ声をかける。

「イチ」

手をさらに強く強く握る。

「ニイ」

二人で顔を見合わせ、微笑む。

「サン」

足が、宙に浮く。

4月8日。金曜日。
空。

風。

もう、何も要りません。

終わり。

もう、何も要りません。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085d/>

もう、何も要りません。

2008年8月29日17時55分発行